

作 小里 清

国語の時間

1940 - 1945 京城

「どうして私はそこで恥じいらなくてはならぬのか おお 悲しき国語の時間よ」

（文炳蘭）

登場人物

甲斐 壮一郎／朴 光熙（パク グァンヒ）
根岸 虎雄／孫 圭徹（ソン ギュチョル）
張本 英紀／張 英植（チャン ヨンシク）
千代田 慎吾／趙 思慎（チョウ サシン）
柳 京子／柳 美京（ユ ミギョン）
木之下 公平／李 同和（イ ドンファ）
丸尾 仁／洪 仁煥（ホン インファン）
伊東 君代／尹 香淑（ユン ヒャンスク）
金村 尚之助／金 尚憲（キム サンホン）
日野 さだ／韓 貞順（ハン ジョンスン）

大日本帝国の統治下にある京城——。
市街を流れる清溪川のほとりに木造平屋建ての校舎を構える小学校（のち国民学校）の教室。

ところ狭しと並べられた小さな机と椅子。その隙間を縫って行き来せねばならないが、一段高い教壇に立てば、一望のもとに見渡せる。

前後に戸口。引き戸の磨りガラスに廊下を通る人影がおぼろげに映る。

窓外の校庭は猫の額ほどしかない。

室内を限なく覆っているのは国語で認められた習字の書。時間割や壁新聞もまた国語で書かれている。

黒板の上には白木造りの神棚と並んで〈皇國臣民ノ誓詞〉。やはり国語だ。

教室に出入りする者は、各々の信条や習慣、時々気分や状況に応じ、首を垂れたり、手を合わせたり、ことによると見向きもしないだろう。

- 一 私共ハ 大日本帝國ノ臣民デアリマス
- 二 私共ハ 心ヲ合セテ 天皇陛下ニ忠義ヲ盡シマス
- 三 私共ハ 忍苦鍛錬シテ 立派ナ強イ國民トナリマス

植民地朝鮮にあつて国語とは日本語にほかならない。しかし朝鮮人のみながみな流暢に話せるはずもなく、程度の差こそあれ、母語の名残をとどめた訛りがある。

1

一九四〇（昭和十五）年七月下旬のある日。午前八時ごろ。
四年一組の教室。

灼けつくような日ざし。窓も戸も閉めきられているため、熱がこもる一方だ。

若い女が黒板を拭いている。バケツの水で雑巾を洗っては隅から隅まで磨く。したたる

汗を拭おうともしない。薄手のブラウスに肌着が透ける。柳京子（朝鮮名は柳美京）、

数えて二十二歳。京城女子師範学校に籍を置く学生。

柳

……

柳、教壇を降り、黒板に目を凝らす。気が済んだのだろうか。ほっとしたように椅子に腰かける。

柳

……

ひと息ついたのもつかの間、戸を開けて廊下を覗く柳。誰もいないことを確かめると、再び教壇に立ち、教卓に置かれた教科書を開く。『普通學校 國語讀本 卷七』。無人の

教室をひと頻り見渡し、教師然と語りかける。

柳 では、みなさん、教科書を開いて……ああ、そのまえに自己紹介を……私の名前は……

柳、白墨を探す。しかしどこにも見当たらない。すると教卓の抽斗から札が出てくる。紐が結わえられた掌ほどの木札。「罰」と墨書されている。

柳 ……

当惑の色を浮かべる柳。慌てて札を戻し、目を伏せる。教科書の上に白墨。不意に蟬の声。

柳 （我に返ったように顔を上げ）ごめんなさい……柳です……私の名前は柳京子……

（黒板に「柳京子」と大きく書き）柳先生と呼んでください……でもまだ本当の先生ではありません……先生の卵……いえ、雛にはなっているかしら……先生として巣立ちができるよう勉強しているところです……しばしの間、ともに学んでいきましょう……

柳、またも教壇を降り、最後列から黒板を眺める。

柳 私の名前は柳京子、柳京子、柳京子……

口になじませようとしているのか。ゆっくりと教壇に歩を進めながら、繰り返し呟く柳。うしろの戸から男が顔を覗かせる。甲斐壮一郎（朴光熙）、三十一歳。朝鮮統治の中核、総督府学務局に奉職する下級官吏。仕立てのよい背広に汗が滲む。手に提げた鞆が重々しい。

甲斐 ……

柳の背を瞬ぎもせず見つめる甲斐。足音を忍ばせて入ってくると、椅子に腰を下ろす。

柳 （振り返りざまに）私の名前は柳京子です……（甲斐の姿を認めてことばを呑む）

甲斐 （弾かれたように立ち上がり）あつ、いや、驚かすつもりは……
柳 こちらこそ……

甲斐 声が聞こえたもんで……しかもきれいな国語が……ついふらふらと……
柳 そんな……からかわないでください……

甲斐 ほら、やっぱりきれいだ……
柳 ……

甲斐 （上着を脱ぎ）参っちゃまうよなあ……開けよ、開けよ……（窓辺に歩み寄る）

柳 授業になりませんから……蝉がやかましくて……

甲斐 授業というと……

柳 あら、てつきりご承知かと……

甲斐 たった今、出会ったばかりじゃないか……

柳 昨日もご挨拶かたがた教員室に……いらっしやいませでした……？

甲斐 まさか……

柳 はっ……

甲斐 いや、ちようど席を外してたんだろう……

柳 夏休みが明けましたら、教育実習がございませので……予行演習といひましようか……校長先生にお頼みいたしまして教室を使わせていただくことに……

甲斐 感心、感心……存分にやってくれ……

柳 申し遅れましたが、私、京城女子師範学校の……

甲斐 それはもう……耳にたこができるほど……

柳、狼狽もあらわに黒板拭きで板書を消す。

甲斐 続けて……

柳 はい……？

甲斐 授業さ……

柳 ああ……ええ……？

甲斐 お邪魔……？

柳 滅相ありません……

甲斐 だっただらお手並み拝見……

柳 先生を相手に授業だなんて……

甲斐 子どもだと思えば……（椅子に座る）

柳 できませんわ……できないからこうして……（逃げるように教壇から降りる）

甲斐 柳先生……

柳 恥ずかしいんですもの……

甲斐 恥ずかしい……？

柳 国語を話すことが……何だかその……お芝居をしているようで……見透かされるんじゃないかと……

甲斐 大丈夫……見事な日本語だ、馬鹿がつくほど丁寧な……ああ、日本人がいうんだから、間違いない……

鞆を開け、何冊もの教科書を取り出す甲斐。

甲斐 国語だろう……

柳 七です……

甲斐 （一冊の教科書を手にとって）四年生か……大変だぞ、生意気盛りで……

柳 いつもそんなにたくさん……

甲斐 仕事柄……さあ……

不承不承、教壇に戻る柳。

柳 教科書を開いてください……「第十七 連絡船に乗った子の手紙」……

甲斐 はい……（ページを繰る）

柳 まずはみなさんに読んでもらいましょう……えつと……

甲斐 甲斐です……甲斐壮一郎……

柳 それでは甲斐先生……

甲斐 甲斐くん……

柳 じゃ……甲斐くん……

甲斐 はい……

甲斐、澁刺とした返事とともに立ち上がり、朗々と教科書を読みあげる。

「第十七 連絡船に乗った子の手紙」

おかあさん、汽車は今朝九時半、釜山の棧橋に着きました。汽車から下りた大勢の人々と一しよに長い列を作って徳壽丸に乗りこみました。

空は晴渡つて風も強くありません。私は甲板に立つて棧橋を見てみました。乗客の荷物でせう、幾臺となく車で運んで来て積みこみました。見送の人が集りました。

出帆のどらが鳴り出しました。汽笛が太くひゞき渡つて、船はしづかに動き始めました。ちやうど十時半です。スクルーのまはる音が聞こえます。スクルーに調子が

ついて来ると、船の動くのがだん／＼早くなります。見送る人、見送られる人、互に帽子やハンケチを振つて、別を惜しんでゐます。船が港口に向つて進むと、絶影島は私共の船を見送つてゐるやうでした。

釜山の港口は潮の流が急で、船がしばらくゆれました。風も少しは出て来しました。

甲板の涼しさは、陸に居ては全く想像がつかえません。二時間ばかり進むと、右手に島が見えました。おとうさんが「對馬だ。」とおっしゃいました。

おとうさんと私がベンチに腰をかけて居ると、乗合はせてゐた金がおとうさんのおいでになって、おとうさんに話しかけられました。「この徳壽丸と慶福・昌慶の三隻が新造された當時は、『おかげで關釜間の連絡も八時間あまりに短縮されて便利になった。』と喜んだのですが、この頃は飛行機を利用すれば、わづか二時間足らずで内地に渡ることが出来るさうです。」「便利な世の中になったものです。将来はこゝも船で渡るのは貨物位で、旅客は皆飛行機を利用するやうになりませうね。」「さうです。その時代の来るのも餘り遠くはありません。」「なほしばらく話をつづけていらつしやいましたが、その中に、をぢさんは「そろ／＼玄界灘にかゝります。少しおやすみになってはいかゞですか。」「言つて船室へお歸りになりました。私は玄界灘を眠つてこしました。目がさめて甲板に出ると、おとうさんが右手の小さい島を指して、「あれが沖の島だ。」「とおっしゃいました。日本海々戦が始つた

のはあの島の附近だと思ひました。

中國や九州の山がかすかに見え始めました。往き来の汽船も三四隻見えてゐます。

おとうさんが「昔朝鮮や支那の文明が此の海を渡つて内地に流れこんだが、今は内地の文明が此の連絡船で朝鮮にはいるやうになつた。」とおつしやいました。

六時半下關に着いて、今、驛前の旅館に休んでゐます。九時五十分の汽車で大阪に向ひます。おかあさん、どうぞおからだを御大切に下さいませ。さやうなら。

八月一日

成一

母上様

朗読の最中、初老の男が深々と頭を下げて入ってくる。根岸虎雄（孫圭徹）、五十六歳。教頭を務める訓導（教諭）。ことばにいくぶん訛りがある。東北の方言だろう。

根岸 朝から精が出るねえ……

柳 ああ、おはようございます……

根岸 （柳の教科書を覗きこむ）何はさておき国語だな……

柳 ええ、一等不得手なもので……

根岸 まつ、内地へ来たと思ひなさい……ひとたび校門くぐつたら、内地なんだと……

甲斐 人はみな日本人、ことばはすべて日本語……

柳 お話のところ恐縮ですが、校長さんでいらつしやいますか……

柳 はあ……？

根岸 教頭の根岸ですけども……

甲斐 こりや失礼いたしました、ずいぶん貫禄がおありなもんだから……

根岸 どちらさまで……

柳 いや、あの、先生では……甲斐くん……いいえ、甲斐先生……

根岸 かい……？

甲斐 昨日、お電話さしあげましたでしょ……

根岸 ああ、はいはい、学務局の……お待ちしておりました……

柳 ……（怪訝な面もち）

根岸 （耳打ちするように）総督府のお役人さん……

甲斐 この夏、赴任してきたばかりで、右も左もわかりませんが、よろしくお見知り

おきのほどを……（根岸に名刺を差し出す）

根岸 （恭しく名刺を受けとり）立派なお名刺ですなあ……

甲斐 いいそびれちまつたんだよ……悪い気もしなかつたしね、先生と呼ばれて……

柳 （柳に名刺を差し出す）

根岸 結構です……（教壇を降りる）

柳 ありがたくちようだいたまえ、お近づきになれた証しに……

根岸 嘘をつく人は好きじゃありません……

甲斐 何たるいいぐさだ……いやはや、まことに無礼（ぶれい）な真似を……大変、申し

わけございません……（腰を折り）君も……

甲斐 まあまあ、教師を騙つたのは事実ですので……

根岸 とりあえずこれは……（名刺を受けとり）じゃ、校長室へご案内しましょう……
甲斐 のちほどひとりで伺いますよ……

甲斐、根岸を尻目に椅子に腰かけると、教科書を掲げる。

甲斐 最後までやっちゃおう……

柳 生憎ですが……

根岸 授業なんぞ新学期がはじまってからでも……

……（鼻で笑う）

根岸 （顔に手をやり）何かついておるかね……

甲斐 少々、ことばに訛りがあるようですけど……内地にいらしたことが……？

根岸 満州になら八年ばかり……線路を敷いてたんです、おなじ身の上の若い衆と……

岩手や宮城から渡ってきた百姓の次男三男……そいつらから国語を教わったもんで、未だにといぼろつと……（もはやことばに訛りはない）

甲斐 でしたらごいっしょに……

根岸 ご冗談を……

甲斐 きれいな標準語を話すんですよ……お手本にはもってこい……

柳 馬鹿にするのもほどほどになさってください……

甲斐 ねっ、たいしたもんでしよう、国語で喧嘩もできるんですから……（席を立てて

さてと、これ以上、怒らせないうちに……

根岸 さあさあ、どうぞこちらへ……（廊下に出る）

甲斐、根岸をよそに踵を返して戻ってくる。

甲斐 大事なことをいい忘れてた……

柳 まだ何か……

甲斐 落書き……

柳 えっ……

甲斐 最近、校内で相継いでんだってよ、落書きが……

根岸 （教室にとって返し）いや、その件につきましては……

甲斐 緘口令ですか……

根岸 見習いには関係ありません……

甲斐 教育実習は三ヶ月に亘るんです……遅かれ早かれ耳に入ってくる……

根岸 まずは校長とお話しいただいて……

柳 そうされたほうがよろしいかと……（教科書を風呂敷に包む）

甲斐 まさか帰るつもりじゃ……

柳 明日、また出直します……（根岸に頭を下げる）

甲斐 学校の問題なんだぞ、やがては君も教鞭をとる……

柳 たかが落書きではありませんの……

甲斐 たかがって……

柳 私も子どものころにはよく……

甲斐 日本の統治に異を唱えたり、朝鮮の解放を訴えたりしてるんだぜ……餓鬼の悪戯なんかじゃあない……大人の仕業だ……（教壇に上がり）黒板やら壁に……あろうことかハングルでねえ……こう……書き殴るように……

黒板に出鱈目な文字を大書する甲斐。

柳 あの……

甲斐 質問があるなら、手を挙げましょう……

柳 ええ……？

甲斐 はいって……

柳 （挙手して）はい……

甲斐 柳さん……

柳 一体、何がおっしゃりたいんですの……私にどうしろと……

甲斐 学校側は当初、事件を隠蔽しようとした……当局にただの一言もなかったんです……一度や二度ならともかく、再三、おなじ目に遭いながら……消せば消えろと考えたのか……（板書を消す）

柳 だから……？

甲斐 君には先生方のようになってほしくないのさ……それを伝えたくって……

根岸 おことばですが……

甲斐 意見があるなら、手を挙げなさい……

根岸 （挙手して）はっ、はい……

甲斐 根岸くん……

根岸 私どもとしましては、内鮮一体の看板（かんばん）に泥を塗ってはなるまいと……その一心だったんです……内地と朝鮮がひとつになるうとしてる最中ですからね……隠そうとは思ってもありませんでしたよ……あくまでよかれかしと……

甲斐 たかが落書き、されど落書き……実際、落書きが口火となって、同盟休校にまで至った学校もあります……ええ、ストライキですよ、ストライキ……おおかた

主義者の奴らが焚きつけたんだろうけど……まかり間違って民衆に飛び火しようもんなら、またしても独立万歳の騒ぎになりかねないんです……一刻も早く火を消しませんと……（教壇から降りる）

根岸 喜んでご協力いたしましょう……

甲斐 ちなみに教頭さんひとりじゃないですよ、半島の先生……

根岸 ぜんぷで三名おりますが……

甲斐 たったの……

根岸 柳くんが採用されれば、四名に……いずれにしても校長はじめ、大半は内地からいらした先生です……

柳 疑っておられるんですね……

根岸 よさんか……本校の教員はみな忠良なる皇国臣民です……

甲斐 ええ、信じてますとも……

突然、けたたましく戸が開けられると、中年の男が足を引いて入ってくる。張本英紀（張英植）、四十一歳。四年一組を担当する訓導。

張本 あれ、授業は……？
 根岸 何だ、まだおつたのか……
 張本 先輩風を吹かしてやろうかって……よし、やるぞ……
 根岸 そんなことよりご挨拶……（甲斐を指す）
 張本 役所のお偉いさんでしょう……
 甲斐 （張本に名刺を差し出し）はじめてお目にかかるかと……
 張本 （甲斐の上着を手にとり）役人か山師ぐらいなもんさ、今日日、こんな代物お召しになれるのは……
 甲斐 本町に腕のいい仕立て屋がございまして……紹介いたしましょうか……
 張本 教師の稼ぎじゃとてもとても……（窓辺に歩み寄る）
 根岸 こら、張本くん……
 張本 道理で暑いと思つたら……

張本、窓を開け放つ。風はそよとも吹き抜けない。蟬の聲がかまびすしい。

根岸 すみませんねえ、揃いも揃つて……（名刺を受けとって）これは私が代わりに……
 張本 おい、ちゃんと頭下げたまえ、何かとご指導いただくんだから……
 甲斐 授業にまで口出しなさらぬよう……
 張本 そのような出過ぎた真似は……
 張本 声が聞こえたぜ……
 根岸 （戸口に目を向けて）立ち聞きしておつたのか……
 張本 教頭だつて冷やかに来たんでしょ……
 根岸 失敬な……こいつは礼儀つてもんを知らんのですよ、朝鮮人のくせに……
 張本 いい見世物だな……まっ、勘弁してやってよ……久方ぶりなんでねえ、若い女の教員なんて……まして同胞ときた日にや……

いたたまれない様子で立ちつくす柳。

柳 あの、そろそろ行かれたほうが……
 根岸 そうだ、そうだ……
 張本 校長でしたら、あちらに……ほら、校門のまえを行ったり来たり……
 根岸 いても立つてもいられなかったのさ……朝からやきもきしておりましたので……
 （出ていこうとする）
 柳 先生も……
 張本 授業はどうすんだい……
 甲斐 人まえではできないんですつて……これじゃ嘴いれようにも……

柳 私のためにお手間をとらせては……

張本 水臭いこといいなさんな……どうせ暇なんだし……

根岸 何をぬかしとるんだ……おまえさんも出かけなきやならんだろ、家庭訪問に……

張本 今日でなくても……

根岸 締切りまで二週間もないんだぜ……

甲斐 創氏改名ですか……

根岸 まだ届けを出していない児童がおりまして……

甲斐 金なら金田、安なら安井……ひと文字足すだけのことでしょ……

根岸 子どもはそう望んでるんですが……日本名に憧れ、朝鮮名を恥じてますから……

張本 それに引き換え大人は頭が固くって……やいのやいのとうるさいんです……

張本 犬にも劣る所業ですからねえ、名前を変えるなんざ……ご先祖さまに申し開きもできません……

根岸 犬といっしょにするんじゃない……

張本 犬以下ですって……ポチは一生ポチだもんなあ……

甲斐 ごもつとも……

根岸 真に受けなくてください……

張本 昔からいわれてきましたでしょ、たとえ死を選ぼうと、姓を変えてはならぬって……

根岸 ……おいそれと変えられるもんじゃないんです……

張本 日本人にしていただけけるんだぞ、畏くも天子さまの赤子に……

甲斐 ちったあ人の身にもなつてほしいもんだ……

甲斐 とおっしゃいますと……

張本 お宅だって愉快じゃねえだろ、ボブだのジョンだのって名づけられちゃ……

甲斐 フランクリン・カイとか……あるいはゲルマン風に見ますかね、同盟国の
 誼みで……アドルフ・カイ……悪くはないでしょ……

張本 話にならん……（椅子に腰を下ろす）

根岸 どこもかしこもこんなありさまでして……

甲斐 だからこそみなさんのお力添えが……

根岸 ええ、もちろん……今朝も教員総出で説得に……

甲斐 役人が相手じゃ耳を貸してもくれませんから……その点、先生と名のつくお方は
 頼りにされておりますので……おなじ朝鮮人なら尚のこと……

根岸 こりやご期待に応えないと……絶好の機会だしなあ、汚名返上の……

張本 何かへまでもしましたっけ……

根岸 未だに白い目で見られたりするだろ、やましいこととしてなくても……その疑いを
 晴らしていかなきやならないんだよ、身に覚えがない罪の疑いを……

張本 朝鮮人であるために……？

根岸 日本人となるためにさ……どうだね、いっしょに……

柳 ……（首を振る）

根岸 名前をいうだけでいいから……先生が変えたんなら、うちも変えようかって……
 親御さんもころつと……

柳 足しても引いてもいないんですよ、柳（ユ）を柳（やなぎ）と読ませただけで……

甲斐 正真正銘、日本人の名前だ……

軒下沿いを若い男がやってくる。千代田慎吾（趙思慎）、二十七歳。おなじく訓導。ちらちらと室内に目をくれるも、足を止めることはない。

根岸 ああ、君、君……（窓辺に歩み寄り）これからかい……

千代田 ええ、まずは並木町へ……（立ち止まる）

根岸 さすが千代田くん……誰かさんとは大違いだ……

張本 行けばいいんでしょう……行きますよ、涼しくなったら……

千代田 子どもたちのためじゃありませんか……

張本 よくいうぜ、てめえだって寄り道したくせに……彼女の顔をひと目見ようと……

根岸 君もか……

千代田 いえ、そんな……たまたま通りかかっただけです……

張本 校門はあっちだぞ……

千代田 あっ、いや、その……

ますますいたたまれない様子を見せる柳。

根岸 何ともお見苦しいところを……どうも浮ついてるようで……

甲斐 教頭さんこそ……またついぼろっと……

根岸 訛ってました……？

甲斐 ほんのちよつとばかり……訛ってましたよねえ……

張本 訛ってたっけなあ……

千代田 訛ってはおりましたが……

根岸 心がけておったんですけど……訛らないよう、訛らないよう……

張本 だから訛っちゃいませんでしたって……

千代田 いや、訛ってましたよ……

甲斐 念のためもう一度……

根岸 えっ……

甲斐 何ともお見苦しいところを……

根岸 何ともお見苦しいところを……

甲斐 ほら……

根岸 やっぱり……

張本 別に気にするほどじゃ……

甲斐 私も目くじら立てるつもりはございませんが、立場上、見過ごすわけにも……

根岸 事務局の甲斐さん……例の件の……

千代田 ああ、ご苦労さまです……ついでに方言のとり締まりですか……でしたらあれを……

張本 何もそこまですることあねえだろう……

千代田 冗談です……

根岸 構わんよ……

千代田 はっ……

根岸 決まりは決まりだ……

張本 お目つけ役がいるからって……

根岸 どこにあるんだい……

千代田 教卓ですよ……

張本 どぶに捨てちまったよ……

千代田 すみませんが、そこに札が入ってますので……

柳 札……？

千代田 罰と書かれた……

柳、教卓の抽斗から札が盛られた木箱をとり出し、一枚手にする。

千代田 それを首に……

柳 そんな……

根岸 （首を突き出し）噛みつきやしないから……

張本 本来は子どもにぶら下げるんだがね、朝鮮語を口にするたんびに……一言につき一枚、ついぼろつとあれしただけでな……無理無体つてもんだよ……一步校門出りや、朝鮮語の世界なんだし……

千代田 ですからせめて学校では日本語を使わせよう……

甲斐 文字通り、国語常用の切り札です……

張本 （教科書を掴み）標準語のときさ、国語ってのは……要するに教科書のことば……みんな標準語を話してるだろ……誰も訛っちゃいない……ご法度なんだよ、方言は……朝鮮語なんぞもつてのほか……

千代田 以前、教頭先生に授業をしていただいたんです……なのに子どもたちときたら、何ていったと思えます……

根岸 よしてくれよ、その話は……

千代田 先生のことばはぜんぶ嘘です……国語で喋ってください……

甲斐 ああ、標準語じゃないもんだから……

千代田 教師たる者、範を垂れませんとね……

根岸 それじゃ札を……

柳 はあ……では、失礼して……（根岸の首に札をかける）

「罰」と墨書された札を胸に立ちつくす根岸。

根岸 しかし妙なもんですなあ、ことばってのは……縁と申しますか……結ぶに結べず、切るに切れず……

甲斐 ためしにラジオで学習してみても……

根岸 ラジオで……？

甲斐 『国語の時間』という番組がありましたね……本物の標準語が聴けますから……

根岸 勉強（ペンきょう）したいのは山々ですけども、肝心のラジオが……

張本 一台なかったつけ……

千代田 校長がひとり占めしてます……

甲斐 三越で七十円かそこいらでしたよ……安いもんじゃないですか……

張本 ああ、酒をやめりゃ、一年で買えらあ……

根岸 まつ、思い返してみれば、縁がございませんでしたからねえ、内地の方とは……

親しくおつき合ひすることはおろか、挨拶を交わすことさえも……話し相手と
いやあ同僚ぐらいなもので……

張本 あんな連中とだべっても、上達しやしませんよ……

根岸 いえ、私どものお手本です……

甲斐 日本人だからって国語に堪能だとは限らんでしょ……事実、方々でよからぬ評
判を耳にするし……

張本 味噌も糞もいっしょに寄越すからだろ……方言丸出しの田舎者まで……あれじゃ
授業になりやしねえよ……俺たちのほうがよっぽどましさ、朝鮮語訛りを差っ引
いても……

千代田 文部省の責任だと思えますがね、私は……言語政策の不備がたたつたんです……

甲斐 現場が混乱するのめいたしかたありません……何を標準語とするか……今もって
線引きされてないとあつては……法律もなしに裁判するようなものでしょう……
今後も協議を重ねてまいりますので、もうしばらくお時間を……

千代田 あつ、時計おもちです……？

根岸 いいや……

甲斐 （懐中時計をとり出して）間もなく十時に……

千代田 大変だ……行かないと……では、いずれ改めて……お役所への注文なら、山ほど
ありますから……

千代田、目礼すると、一目散に去る。

甲斐 （名刺を手に窓辺に駆け寄り）また渡しそびれちまった……

根岸 （名刺を受けとり）私がいただいておきましょう……

甲斐 少々、手強そうですね、千代田くん……

張本 日本人にもまして日本語を愛してるんでな……

根岸 一時、東京帝大におったんですよ……もっぱら国語の研究を……

甲斐 つてことは上田万年博士の教えを継いでるんだ……

根岸 上田万年……？

柳 曰く……日本語は日本人の精神的血液なり……

甲斐 ほほお、よくご存じで……

根岸 さすがにもう行きませんか……

甲斐 （上着を掴み）すっかり長居しちまつて……居心地がよかつたんでしょかね……

根岸 おまえさんもぐずぐずしてないで……

張本 はいはい……

木之下 見つけた……

張本 おお……

木之下 張先生……

張本 張本だよ、今は……

木之下 張本先生？……おかしいです、張本先生なんて……

室内に入ってくる木之下。当世風の帽子や洋服を袴に着こなしている。手には大きな旅行鞆。いわゆるモボ（モダンボーイ）だ。

張本 卒業生……六年間、ずっと俺が受けもった……

木之下 木之下です……木之下公平……下の名前は先生考えました……

張本 よせよ……気が咎めるじゃねえか、人生まで変えちまったみてえで……

木之下 何も変わっていません……

張本 だといいんだが……ああ、彼女……

木之下 新しい先生……教頭先生聞きました……

柳 どうもはじめまして……実習生の柳と申します……

木之下 うらめしい……

柳 はい……？

木之下 国語が上手です……

張本 それをいうなら、うらやましい……

木之下 うまやらしい……

張本 たしかに相変わらずだなあ……どうせ遊び呆けてんだろう、明治町あたりで……

木之下、教卓に旅行鞆を置く。

木之下 東京行きます……

張本 東京……？

木之下 高等学校……

張本 諦めの悪いやつちゃ……去年も散々だったんだぜ、入学試験……

木之下 問題がちよっと難しくくて……

張本 ろくに読めもしなかつたくせに……

木之下 心配いりません……内地ですよ……人はみな日本人、ことばはすべて日本語……

張本 すぐ上手くなります……国語できれば、仕事もいろいろ……

張本 夢ばかり見よつて……本当は京城に飽きたんじゃねえのか……

木之下 遊びに行く違う……勉強、勉強……信じてください……

張本 好きにしな……それができるご身分なんだから……（教壇を降り）まつ、ともあれ

木之下 一杯やろうや、二度目の門出を祝って……

張本 いいですね……先生とお酒飲む……最後かもしれない……

張本 縁起でもない……

木之下 内地に骨を休める覚悟です……

張本 骨を埋める……

木之下 えっ……

張本 行くぞ……

柳 先生、家庭訪問……

張本 ああ、うっかり……悪い、悪い……そういうわけだ……駅まで送ってやるよ……

根岸、教室に戻ってくる。

根岸 おつ、ようやく重い腰上げたか……

張本 木之下見送りがてら……内地へ渡るんですって……

根岸 聞いた、聞いた……

張本 半年もしないうちに舞い戻ってくるでしょうがね、東京にも飽きて……

根岸 じゃ、ついでにラジオを買ってきてほしいんだけど……

木之下 ラジオ……？

張本 ラジオなら京城でも売ってるじゃありませんか……

根岸 内地のラジオがいいんだよ……お薦めはナショナル製だつてさ……頼んだぜ……

木之下 はっ、はい……

張本 すまんが、校門で待つてくれ……話があるんだよ……

根岸 一生懸命、勉強するんだぞ……たまには手紙も……

木之下 ええ、必ず……書けるようなら……

旅行鞆を手にとっていく木之下。

根岸 由緒正しい両班（ヤンバン）の家柄なんだ……その上、日本人と手を組んで大儲け

したもんだから……毎日、おやつにホットケーキを召しあがってるんだとよ……

どんな食い物なのか想像もつかんが……

あの、お話がごさいますなら……

張本 柳 むしろ聞いてもらいたい……例の件、知ってるだろ……

柳 あらまは……

張本 それで……？

根岸 それで……

張本 あの若造は何と……名刺渡しただけじゃないでしょ……

根岸 さあ……

張本 同胞にまで隠さなくても……

根岸 ものの五分で戻ってきたんだぞ……本題に入るや否や、お役ごめん、席を外してくれないかって……教頭という立場（たちば）にありながら……

張本 内鮮一体もひと皮むけばこれだ……

根岸 精進が足らんのだよ……もつと忍苦鍛錬しないと……

張本 せいぜい頑張ります……

足を引きずって教室を出ていく張本。

根岸 （声をひそめて）何か吹きこまれやしなかったかい……

柳 吹きこまれる……？

根岸 日本がどうのこうのって……お上に逆らうようなこと……

柳 ……（首を振る）

根岸 ここだけの話、物騒（ぶっそう）な噂があるんでね……かつて共産党の一員だった

柳 とか……ああ、共産党ってのは……

柳 アカですか……学校で教わったことが……

根岸 （笑みを漏らし）さすが師範学校……ほら、跛（びっこ）を引いてるじゃないか……たぶん官憲にしょっぴかれたんだろう……こつぴどくやられたんだよ……それに懲りて足を洗ったそうだけど、根は変わっちゃおらん……くれぐれも感化されんように……

柳 はあ……

根岸 お袋さん、長患いされてるんだってな……

柳 ああ、ええ……

根岸 何かと物入りだ……

柳 うちも両班ではありますけど、土地はもうあらかた人手に……

根岸 教師になれば、月四十五円の実入りがある……葉代も賄えるだろ……

柳 はい……

根岸 さて、儂も助太刀に行くか……

根岸が立ち去るや、戸を開めきり、教壇に登る柳。しかし教科書を開こうともしない。

柳 ……

そこへ不意に甲斐が入ってくる。

甲斐 失礼……（鞆を指し）忘れ物……すぐにお暇する……

柳 ……（帰り支度を始める）

甲斐 何だい、僕が来たからってそそくさと……

柳 別に……

甲斐 だったらやんなよ……やつとひとりになれたんだし……

柳 その……ちよつと怖くなりました……

甲斐 怖い……？

柳 子どもにことばを教えるなんて私には……母親でもないのに……

甲斐 君になら代わりが務まるさ、男にもできるんだから……

柳が出ていこうとすると、甲斐が戸口で行く手を遮る。踵を返す柳、先回りする甲斐。

甲斐 （何かいおうとする柳を制し）質問してもよろしいですか、先生……

柳 本物の先生方にお尋ねください……

甲斐 生憎、みんな出払っててね……誰もいないんだ……立ち聞きされる気遣いも……
……

甲斐 落書きについて聞かせてほしい……

柳 お間違いないやありません？……今日、はじめて知ったんですよ……

甲斐 じゃ、あれは……？

教室の隅にバケツと雑巾が置かれている。

甲斐 雑巾のあとがうつすらとね……

柳 水拭きましたんです、まっさらな黒板で授業がしたくって……

甲斐 どんなことばが書かれてた……

柳 ……

甲斐 口にはできないようなことかい……

柳 たわいないものですわ……零戦やら軍艦の絵だとか……そうそう、友だちの悪口も……もちろん国語で……

甲斐 君まで隠し立てしようとは……

柳 私が嘘をついていると……？

甲斐、ポケットから手帳をとり出すと、白紙のページを開いて柳に差し出す。

甲斐 何か書いてくれない、ハングルで？……名前がいいから……

柳 筆跡……？

甲斐 参考までに……教頭さんも書いてくださったよ……

柳 ……（手帳に鉛筆を走らせる）

甲斐 （手帳を覗きこみ）朝鮮名か……長いなあ……

柳 読めないんですの……

甲斐 読めたって何の役にも立ちやしねえ……

柳 （手帳を返して）お知りになりたければ、ハングルを勉強なさってください……

風呂敷包みを抱えて去ろうとする柳。

甲斐 （柳に追い縋り）待つて……悪かった……君を疑うなんて見当外れもいいとこだよ

……お詫びにうちまで送ろう……

軒下にまだ幼さの残る女がたたずんでいる。甲斐を睨めつけるその形相は険しい。伊東君代（尹香淑）、十八歳。朝鮮総督府学務局局长、大槻國成の家に仕える女中。矢絰の着物に割烹着を纏っている。

伊東 ……

柳、伊東に気づいて小さく息を呑む。

甲斐 （振り返って）君ちゃん……

柳 お知り合い……？

甲斐 女中さん……

柳 女中さん……（甲斐を窺う）

甲斐 （声をあげて笑い）僕の世話など願い下げだろ……

伊東 ……

甲斐 局長のお宅に仕えてるんだ……大槻國成……知らなきゃもぐりだぞ……雲の上の人だがね、何かと目をかけてくださって……その縁で君ちゃんとも……なあ、君ちゃん……

伊東 ……

甲斐 どうしたんだい、さつきからふくれっ面して……

伊東 忘れましたか……

甲斐 何を……

伊東 約束です……

甲斐 君ちゃんとの……？

伊東 お嬢さま……

甲斐 あっ……（慌てて鞆に教科書を詰めこむ）

伊東 （咳くように）甲斐さんの馬鹿（ばか）……

甲斐 駅でお出迎えすることになってたんだ、大槻家のご令嬢を……内地から帰ってこられるってんでね……だから……

柳 お気になさらずに……

甲斐 何時の汽車だっけ……（懐中時計を見やる）

伊東 九時半……

甲斐 時間通りに来やしないだろう……

伊東 もうお屋敷にいるですよ……タクシーで帰りました……

甲斐 おかんむりか……

伊東 泣いています……かわいそう……

柳 今からでも会いに行つてあげませんか……

甲斐 じゃ、いづれまた……校門で待つてなさい、校長さんにご挨拶してくるから……

甲斐、鞆を掴むが早いか、教室を飛び出す。

伊東、立ち去るそぶりも見せず、柳をじっと見据えている。

柳 校門はあちらですけど……

伊東 お嬢さま、女学校出（て）たら、甲斐さんと結婚（けこん）する……邪魔しないでください……

柳 ええ……？

伊東 私、ここにいます……ふたりいつしよはよくない……

柳 いや、だから……君ちゃんよねえ……

伊東 ……（首を振る）

柳 君ちゃんでしょう……君ちゃん、何か思い違いをしているんじゃないかしら……
何でもないので、あの方とは……お名前とお仕事しか知らないんだもの……

伊東 知っていますよ、私……

柳 もうよしてちょうだい……

伊東 甲斐さん、さみしい、とてもさみしい人……

柳 ……

伊東 お嬢さまと幸せなつてほしい……

柳 ごめんなさい……

先刻から廊下をうろうろする男が見え隠れしている。人を探しているのかもしれない。

丸尾仁（洪仁煥）、三十二歳。在校生丸尾哲（洪哲輝）の父親。埃まみれ、垢だらけの体にぼろぼろな野良着。悪臭さえ放っている。

丸尾 ……

柳、廊下を覗いて声をかける。

柳 何かご用で……

丸尾 （足を止めて振り返り）あつ、四年一組、とこ……

柳 四年一組？……ここですけど……（戸口の表札を指す）

丸尾 （表札を見上げ）四年一組……？

柳 お目に入りませんでしたかね……

伊東 読めないですよ……

柳 ああ、すみません、とんだご無礼を……どうぞ中へ……

丸尾、尻込みするも、室内に足を踏み入れた途端、目を見開いて眺め回す。とりわけ

「皇國臣民」と認められた習字の書に興味を引かれたようだ。

丸尾 息子（むしゅこ）、とれ……

柳 息子？……では、お子さんが四年一組に……

丸尾 哲（てちめ）……丸尾哲……

柳 あら、丸尾くんのお父さまでございましたか……

丸尾 はい、丸尾くんのお父さまよ……

柳 （書に目を走らせ）丸尾くん、丸尾くん、丸尾くん……これですわ……

丸尾 ……（書をまじまじと見る）

柳 お上手ですねえ……

丸尾 （胸を張り）哲、いちばんお上手（じょうじゅ）……

柳 先生もよくできましたって……

丸尾 張本先生（しえんしえ）……？

柳 ええ、褒めてくださったんです……

丸尾 （表情を陰らせて）私、先生、話あります……

柳 何かご相談でも……

丸尾 先生、とこ……

柳 只今、お出かけになっておりまして……

丸尾 ……？

柳 いらつしやらないんですよ……おいでになりません……おられないんです……

丸尾 いない……？

柳 そう、いない……ですからまた日を改めて……恐れ入りますが……

丸尾、すこすごと戸口に歩を運ぶ。

軒下に鞆を提げた甲斐が駆けこんでくる。

その姿を目の端にとらえるや、足を止め、立ちすくむ丸尾。

甲斐 君ちゃん、どうしてここに……校門で待つてろって……

伊東 甲斐さんもうしてここに……校門あつちです……

甲斐 教科書忘れたんだよ……

柳 教科書……？

甲斐 （窓から覗きこんで）たぶんそのへんに……たびたびすまないね……

伊東 わじゃとてしよ……

甲斐 ええ……？

伊東 あの女近ぢゆいちゃいけません……

甲斐 何をいつてるんだい……

柳 どうもおかしな誤解をなさっているようで……（教科書を渡す）

伊東 いいなあ、日本人みたい、国語……甲斐さんとお喋（しゃべ）りてきる……

甲斐 相手にしないで……

伊東 ても朝鮮人ですから……

甲斐 いい加減にしろ……

伊東 おい、ヨボ……こら、ヨボ……

甲斐 君ちゃんだってそうじゃねえか……

伊東 ……

甲斐 悪気はないんだ……子どもの戯言さ……

伊東 子ともじゃありません……私、もう子ともじゃないです……

柳 早く連れて帰ってください……

甲斐 さあ、君ちゃん……

丸尾、引き寄せられるように甲斐に近づいていく。

柳 どうされました……

丸尾 この人……

甲斐 （振り返る）……

柳 甲斐さんが何か……

丸尾 かい？……朝鮮（ちよせん）の名前は……？

伊東 甲斐さんは甲斐さんてす……日本人だから……

丸尾 日本人（にほんじん）……

甲斐 どうもはじめまして……（名刺を差し出し）読めますかねえ……

丸尾 ……（受けとった名刺に見入る）

柳 ご父兄の方です……丸尾さん……

丸尾 （顔を上げ）丸尾さん違う……

柳 えっ……

丸尾 （窓から身を乗り出し）私、仁煥……洪仁煥……

甲斐 すみませんが、急いでおりますので……行こう……

伊東 ……（丸尾を睨みつけている）

甲斐 ほら、君ちゃん……

甲斐、伊東を従えて校門のほうへ去っていく。
呆けたように立ちつくす丸尾。

柳 ひよっとしてご存じですの、あの方……

丸尾、頻りに首を振り、教室を出ていこうとするも、ふと立ち止まる。

丸尾 先生、話聞いてください……ご相談（しょうたん）……

柳 まあ、私でよろしければ……

丸尾 （朝鮮語で話しはじめる）

柳 （慌てて手で制し）あつ、いや……（首を振り）学校では……国語でお話しいただけますか……

丸尾 ウリマル（我々のことば）駄目（ため）……？

柳 申しわけございませんが……

丸尾 哲、国語とても上手てす……でもウリマル忘れました……私、日本語わからない……あいちゅ、朝鮮語わからない……話すてきません……

柳 ……

丸尾 どうする、先生……

柳 お父さまが国語を身につけるよりほかにないかと……この秋、講習会がはじまるそうですし……国語の講習会……大人が通う学校です……できましたらお父さまも……

丸尾 ……

柳 本当に申しわけございません……教師なのにこんなことしかいえなくて……

肩を落として教室をあとにする丸尾。
柳、そのうしろ姿を見送ると、意を決したように教壇に立つ。

柳 では、みなさん、教科書を開いて……

2

一九四一（昭和十六）年十一月月上旬のある日。午後三時すぎ。
五年二組の教室。

室内の様子はさほど変わっていない。習字の書の文言（「宮城搖拜萬歳」）がいささか難しくなっただけのものだ。
女が片膝を立てて椅子に座っている。老婆という形容が相応しい容貌と風采。日野さだ（韓貞順）、五十七歳。何やらぶつぶつと呟きながら、書きものをしている。傍らには国語の教科書。『ヨミカタ 一ネン下』。帳面に筆写しているようだ。

「七 ラジオノ コトバ」

日本ノ ラジオハ、

日本ノ コトバラ ハナシマス。

正シイ コトバガ、

キレイナ コトバガ、

日本中ニ キコエマス。

マンシウニモ トドキマス。

シナニモ トドキマス。

セカイ中ニ ヒビキマス。

日野、ひょっと顔を上げると、誰もいない教壇に向かって語りかける。

日野 わかりません……教えてください……何ですか、ラジオ……

声 うるさい……

子どもだ。おそらく教卓の下に隠れているのだろう。丸尾の息子、哲である。

日野 うるしやい？……ラジオ、うるしやいてすか……うるしやい、何ですか……

声 婆ちゃんのことか……

廊下のほうからかすかに足音。

日野 （声をひそめ）誰（たれ）か来る……（席を立つ）

声 馬鹿……

日野 張本先生（せんしえ）……？

人影が磨りガラスの向こうをよぎっていく。

日野 （戸に耳を当て）大丈夫（たいじょうぶ）……（席に戻る）

声 ……

日野 （教科書に目を落とす）「日本（にほん）のラジオは日本のことばを話します」……

（立ち上がり）ああ、皇国臣民か、ラジオ……

声 ……

日野 先生聞きます……（戸口に歩み寄り）張本先生……

声 （教卓から手を出し）俺が教えてやるから……

日野 いい子、いい子……（教科書を渡す）

声 これだよ……これがラジオ……（教科書の挿し絵を示す）

日野 （教科書を覗きこみ）これがラジオですか……ラジオ、何ですか……

突然、戸が開けられ、木之下が姿を見せる。

少年、慌てて手を引っこめる。

一段と洒落た身なりの木之下。胸には風呂敷包み、足もとには旅行鞆。訝しげに室内を見回す。

木之下 あの、張本先生は……

日野 先生……？（首を振る）

木之下 あれ、声が聞こえたんだけどなあ、先生を呼ぶ声……（旅行鞆を手に入ってくる）

日野 ……（教卓のまえに立ちはだかる）

木之下 そこか……

日野 （手を払い）しっしっ……

木之下 いや、何も匿うことないでしょ……先生もほら、隠れてないで……

声 静かにしてください……

日野 わかりましたか……

声 婆ちゃんも……見つかっちゃうじやないか……

木之下 （声を抑え）何だ、かくれんぼか……先生が鬼なんだろう……僕もよくいっしょに

やったもんさ……（出ていこうとする）

日野 とこ行く……

木之下 先生を探しに……

日野 駄目（ため）、駄目……

木之下 野暮な真似はしませんよ……ご挨拶するだけです……

風呂敷包みと旅行鞆を机に残して駆けていく木之下。廊下に出たところで背後から呼び止められる。
張本だ。姿は見えない。

張本 (声) おお、木之下……

木之下 (振り返り) 張本先生……

張本 (声) いつ帰ってきたんだい……

木之下 つい先ほど……もうへとへとですよ、玄界灘が大しけで……行きは一等でしたが、帰りは二等に乗ってきましたしね……

日野、教卓を覗きこみ、窓から逃げるよう少年を促している。

張本 (声) まあ、立ち話もなんだから……

木之下 では、あちらの教室で……

張本 (声) どこだっておんなじさ……

木之下 ここはちよつと……

張本 (声) おまえ、落書きしたんじゃあるめえよなあ……

木之下 落書き……？

張本 (声) まさかね……さあ、入った、入った……

木之下の背中を押して入ってくる張本。国民服を身に纏い、足にゲートルを巻いている。

日野 張本くん、遅刻……(廊下を指し) 立てなさい……

張本 どうなされたんです、オモニ……講習会はお休みですよ……

日野 お休(やしゆ)み……？

木之下 ああ、明治節か……

張本 天皇のハルポジの誕生日……

木之下 街中、日の丸だらけでしたよ……

張本 学校でもお祝いの式典が行われましてね……教育勅語を奉読したり、君が代斉唱したり……今日はそれでおしまい……(校庭を見渡して) ほら、人っ子ひとり……

日野 (項垂れる) ……

張本 昨日、お伝えしたはずですが……(帳面を覗いて) ここにもちゃんと……

日野 ……(首を振る)

張本 ああ、読めなかったんだ……

日野 すみません……帰ります……(教壇から降りる)

張本 いや、折角だから、自習でも……(教科書を手にとって) まだ写しおえてないようだし……

木之下 講習会つてのは……

張本 大人のための国語の授業……大盛況なんだぜ……日が傾くと、三々五々集まって

くるんだよ、仕事も家事もそつちのけで……オモニなんぞ三里も先から……おま
えもちったあ見習え……

木之下 僕は内地でみっちり……

日野 内地……？

張本 勉強しに行つてたんです……一年で音をあげちましたけど……
木之下 少しは上手くなつたでしょう……

日野、木之下に擦り寄り、その手を握る。

日野 息子（むしゅこ）知りません、私の息子……？

木之下 息子さん……？

張本 昔、生きわかれたね……東京にいらつしやるんだつてさ……人伝にそう……
木之下 お名前を伺つても……

日野 光熙……朴光熙……

木之下 朴光熙？……（首を捻り）日本名は……？

日野 日本名……？

木之下 僕は木之下公平、先生は張本英紀……息子さんは……？

張本 それがわかりや、苦労しねえつうの……

日野 私、手紙（てがみ）書くよ……

張本 そのために国語を勉強されてるんだ、息子さんに手紙を書こうと……
木之下 ハングルのほうが手つとり早いでしょ……

張本 誰が教えるんだい……

荷物をまとめる日野。

張本 ところで子どもを見かけませんでした……？

日野 子ども……？

張本 かくれんぼをやってるんですが、最後のひとりが見つからなくて……
木之下 ずるい……

張本 もうやめたつてわけにはいかんだろ……ねえ、オモニ……

日野 私、知らないです……さようなら……

日野、饜鑠とした足どり去っていく。

張本 日本名どころか、居場所もわからねえんじやなあ、いくら手紙を書いたつて……

木之下 あつ、これこれ、お土産……（風呂敷包みをとく）

張本 ラジオじゃないか……

木之下 お望み通り、ナショナルです……一家に一台、国民ラジオつてね……

木之下、ラジオのつまみを回してチューニングする。ところがラジオはパチパチと空電

ノイズを響かせるばかりでうんともすんともいわない。

木之下 おかしいなあ……あっちでは聞こえたんだけど……

張本 どうせ座敷の置き物になるんだから、音なんか出なくても……

木之下 ちよつと表でためしてみます……

ラジオを胸に抱えて教室を飛び出していく木之下。

遠ざかる足音に耳を澄ます張本。そして黒板に目を向け、ゆっくりと歩み寄る。

張本 ……

甲斐が荷車を引いてやってくる。教科書が山と積まれているようだ。張本の姿を認め、窓辺に近づいていく。

張本 （気配に振り返って）あんたか……いるならいるといってくれ……

甲斐 すみません……（窓に手をかけて）開けていただけますか……

張本 ……（窓の錠を外す）

甲斐 （窓を開け）何をなさってたんです……

張本 いや、別に……

甲斐 探しておられましたよ、みなさん……もうじきお見えになるかと……

張本 （荷車を見やり）教科書か……

甲斐 （荷車から教科書の束をもってきて）ごらんになります……？

張本 そんな気分じゃ……

甲斐 一体、何をなさってたんです……

張本 だから子どもたちと……

甲斐 （教科書を差し出し）今ですよ、今……

校庭に木之下が姿を現す。

張本 よお、聞こえるようになったかい……

木之下 やはり駄目ですねえ……

張本 じゃ、電気屋にもついでいこう……校門に回ってくれ……（出ていこうとする）

甲斐 今日は明治節、どこも店を閉めてますよ……

張本 そうだっけ……（足を止める）

甲斐 僕が直してやろっか……

木之下 えっ……

甲斐 見せてごらんよ……

木之下 あっ、はい……（窓辺に歩み寄り、ラジオを差し出す）

甲斐 ナショナル製じゃないか、それも最新の……半島にはまだ出回ってないだろ……

木之下 銀座の三越で買いましたので……

張本 内地帰りなんだ……教頭への土産……お宅が唆したもんだから……

木之下 どんな具合でしょう……

甲斐 コンデンサーを調べてみないことには……まつ、お茶の子さいさい……ラジオが唯一の道楽なんでね……聴くのはもちろん、分解したり、組み立てたり……では、お願いしても……

甲斐 お安いご用……そのまえにこれを片づけないな……（ラジオを木之下に返す）

甲斐、荷車から教科書を運んで窓際に積み上げていく。

木之下 教科書……？

張本 お下がりでよ、日本人が使い古した……

甲斐 この春、学校の看板が替わったろう、小学校から国民学校に……併せて教科書も改訂されたんで、譲っていただいたのさ……

張本 ほら、おまえも手伝ってやんな……

木之下 いや、僕はそろそろ……お母さまが心配しますし……（ラジオを手渡す）

張本 お母さまか……（ラジオを教卓に置く）

教室のまえを通りがかった柳、戸口で立ち止まる。筒袖の上着にもんぺ姿。

柳 先生、どこにいらつしやったんです……学校中、探しましたのよ……

張本 どこっていわれても……あちこちに隠れたから……

甲斐 ひよっとしてかくれんぼ……？

柳 面倒なこととなると決まって……

木之下 そうだ……早いとこ見つけてやりませんと……待ってるんじゃないかな……

張本 しかしどこにいるんだか……（あたりを見回し）哲、いい加減、出てきやがれ……

柳 じきにひよっこり顔を出しますよ、痺れを切らして……（甲斐が手にした教科書を張本に渡し）さっ、仕事、仕事……

張本 変われば変わるもんだら……

木之下 ええ、すっかり一人前の先生ですね……

柳 とんでもありません……木之下さんこそ国語がとてもお上手に……

木之下 いや、僕なんて……この年になっても、わからないんだから、自分が何をしたいのか……

甲斐 軍隊にでも入ったらどうだい……

木之下 志願兵……？

張本 笑わせんな……

甲斐 思想堅固にして体躯強健……条件は満たしてるでしょ……

張本 お坊ちゃんにそんな度胸あるもんか……

木之下 度胸ではありません……理由がないんです、志願する理由が……

張本 まあ、たしかに名乗りをあげてるのは百姓の倅ばかり……親兄弟を食わせていくためだ……

甲斐 君も日本人だろ……十分じゃないか、それで……

根岸、続いて千代田が教室に入ってくる。ともに国民服姿。

根岸 (息を喘がせ) やつとこさ着いたあ……(腰を押さえて) 痛たたたつ……

柳 ご無理をなさるから……(椅子を引き) どうぞおかけになつて……

根岸 年には勝てんな……(椅子に座る)

千代田 難儀しましたんでね……もう重い何のつて……(掌を見せ 見てくださいよ……)

張本 そらあご苦労さんでした……お茶でもおもちいたしましょう……(去ろうとする)

根岸 またとんずらするつもりだろ……

張本 ばれたか……

根岸 ったくおまえさんは……(窓外を見て) おお、木之下……

木之下 (窓から覗きこみ) お久しぶりです……只今、帰ってまいりました……

甲斐 教頭さんへのお土産ですつて……

根岸 ラジオか……(教卓に歩み寄り) だけどこんな高いもんを……(ラジオをいじる)

張本 自分からせがんでおきながら……

木之下 構いませんよ……あぶく銭を使ったままで……

千代田 教え子ですか……

張本 お大尽の跡とりなんだよ……小遣いなんざ俺の給金よりもらつてんだぜ……

千代田 (木之下を見やり) だからつてあの格好はいかがなもんでしょ……

木之下 これも銀座で誂えまして……

千代田 (窓辺に歩み寄り) 贅沢は敵だ……国民服を着たまえ……

木之下 国民服なんて野暮つたいですから……

千代田 何だときさま……(窓から身を乗り出す)

張本 (千代田を制して) まあまあ、そう堅いこといいなさん……(旅行鞆を差し出し)

木之下 おまえもとつと……おやつ時間だろう……

木之下 こつちも窮屈になつてきましたね……

木之下、旅行鞆を手に校庭を駆けていく。

根岸 おい、音が出んぞ……

甲斐 どうも壊れてしまったようで……のちほど修理しておきます……

根岸 いや、これ以上、お手を煩わせるわけには……ええ、あとは私どもが……

甲斐 乗りかかった船ですよ……しまいまでおとませてください……

甲斐、次々と教科書を教師たちに手渡ししていく。

張本 よくもまあ、こんなにたくさんの……

柳 みんなの手に渡りますよ……

千代田 しかもそこに自分の名前が書けるんですよ……

根岸 甲斐さんのおかげさ……

甲斐 私は何も……

根岸 いいえ、甲斐さんが動いてくださったからこそ……

千代田 もうお手上げでしたんでね……鼠のように子どもが増える一方で……教室に入り
きらないほど……その上、大人まであれよあれよという間に……そうなると教科
書なんぞいくらあっても足りなくて……やれ、盗難だ、やれ、喧嘩だ……

根岸 まことに何とお礼を申しあげてよいやら……

甲斐 感謝するなら、向こうの方々に……快くお譲りくださったんですからね、困った
ときはお互いさまだと……

根岸 まさしく内鮮一体ですなあ……

突然、窓ガラスが粉微塵に砕ける。石が投げこまれたようだ。

校庭に子どもたちの歓声が響く。

張本 (窓から身を乗り出し) くら、待て……このくそ坊主……おい、捕まえてくれ……

甲斐 えっ……(呆けたように立ちつくす)

張本 早く……

根岸 なくに、構うことはありません……

張本 日本人ですよ……逃げられちゃ、手出しできないでしょ……

千代田 日本人？……朝鮮人じゃないかなあ……

張本 よく見ろ……着てるもんが違うだろうが……

根岸 いずれにせよ子どもの悪戯……見逃してやれ……

張本 いいや、腹の虫が治まりません……学校側に抗議してやろう……(柳を見やる)

柳 私も……？

根岸 関わるな……

千代田 (戸口に立ちほだかり) ちよ、ちよっと……ひとまず落ちついて……

張本 邪魔するんじゃないか……

根岸 何もことを荒立てなくても……今にはじまったことじゃないんだし……

張本 そんな弱腰だから、つけこまれるんです……一遍、きっちり詫びを入れさせない
と……

根岸 こっちには借りがあるんだ……辛抱(しんぼう)してくれ……

張本 それとこれとは……ほら、どけ……(千代田を払いのけて) さあ……

柳 ……(首を振る)

張本 なぜ……

柳 しかたがありません……

甲斐 でしたら私がお灸を据えておきましょう……総督府としましても看過できません
のでね、内鮮一体を掲げている以上……

根岸 本当にご迷惑ばかりおかけして……

甲斐 お気になさらないで……(教科書を差し出し) はい……

柳、壁に立てかけられた箒と塵とりでガラスの破片を集める。
千代田、教科書を抱えて出ていく。

千代田 （去りしなに） 教頭、柳先生に教えてあげませんと……

根岸 そうそう……君の受けもちだっけ、丸尾……
哲くんが何か……

根岸 留守中に通知が来てたんだ、学務局から……たまげたねえ……丸尾のうちが選ばれたんだってよ、〈国語の家〉に……

張本 〈国語の家〉ですか……へえ、それはそれは……

柳 〈国語の家〉……？

根岸 親子ともども国語を常用しておる……まつ、模範的な家庭つてことですよね……とりわけ息子さんが優秀だそうで……日本人顔負けだと伺いましたよ、手習いも綴り方も……神童とまで称されてるんだとか……

柳 ……

甲斐 つきましては親御さんに庁舎へお越しいただくようお願いください……総督直々に表彰状をお渡しいたします……おまけに表札も……墨痕鮮やかに〈国語の家〉と認められた白木の表札です……

柳 はあ……

根岸 気のない返事しやがって……名誉なことなんだぞ……本校はじまって以来だしな……折を見て校長に発表していただこう……本人には君の口から……

教科書を提げて出ていく根岸。

柳 甲斐さんじゃありません……？

甲斐 えっ……

柳 ですから哲くんのおうちを〈国語の家〉に……

張本 何だ、お宅が手を回したのか……

甲斐 （声をあげて笑い） そんな義理もなければ、立場でも……どうしてそう……

柳 いや、何とはなしに……

張本 たしかに親父さんなんて仮名の読み書きも覚束ないのに……

甲斐 けちをつけることもないでしょうが……

柳 失礼しました……

柳、ガラス片を捨てに行こうとするも、張本の話に足を止める。

張本 まあ、これはこれでいいのかもな、あの親子にとっちゃ……ご褒美みたいなもんよ……散々、苦勞してきたから……今も金を借りてまで学校にやっってるんだぜ、息子には学をつけさせたいって……

柳 お仕事は……？

張本 聞いてないのか、哲から……

柳 話してくれませんか……

張本 臭いでわかりそうなもんだけど……汚穢屋……

柳 汚穢屋……？

張本 便所の汲みとりだよ……

柳 ああ……

張本 まえは小作で食いつないでたんだが、一昨年の日照りでどうにもならなくなつてさ……着の身着のまま、京城へ流れてきたものの、なかなか職にありつけなくて……何せお人好しなもんだから……しかも白丁（ペクチョン）だし……

柳 （顔を顰めて）白丁？……丸尾さん、白丁ですの……

張本 大きな声出すなつて……

甲斐 ……（一瞬、棒立ちになる）

張本 あつ、いや、こつちの話……

張本、教科書を抱えて出ていく。

甲斐 変わんねえなあ……

柳 はい……？

甲斐 何でもない……（作業に戻る）

柳 ご存じなのかしら、白丁のこと……？

甲斐 いや、まあ……日本にもいるんで、穢多つて呼ばれる手合いが……変わらないつてのはそういうこと……

根岸、戻ってくる。

根岸 ああ、柳くん、校長がお呼びだ……

柳 今ですか……

根岸 君の帰りを待つていらしたそうだから……

甲斐 どうかなさいました……

根岸 お酌をさせられるんですよ……いえ、ごくたまに……どうもお気に入りのように……（手を合わせて）いつもすまんなあ……

柳 やめてください……

箒と塵とりをもって立ち去る柳。

根岸 （戸口で柳を見送り）新町のお座敷じゃあるまいし……これも内鮮一体なのか……

甲斐 いや、冗談ですけど……

根岸 ほら、教頭さん……

（教科書を受けとり）奥さまは勘繰つておられるみたいですが……他人事じゃございませぬよ……許嫁がいらっしゃるんですから、火遊びだけはなさらぬよう……ことに朝鮮の女には用心しませんとね、情が濃いつたらないんで……

甲斐 ご忠告痛み入ります……

根岸 甲斐さんのためを思つてのことです……そういえば、昇進の話がもちあがつておるんだとか……まっ、その節はよろしくお引き立てのほどを……

根岸のことばをかき消すように轟音が響き渡る。上空を戦闘機が飛来しているようだ。
千代田、戻ってくるや、窓辺に駆け寄る。

千代田 零戦ですよ……立派だなあ……

根岸 いやいよか……

甲斐 時間の問題でしょうねえ、鬼畜米英と戦端を開くのも……

根岸 教え子が幾人も兵営に入つておるんですよ、志願兵として……

千代田 そんな浮かない顔なさらなくなつて……誇らしいことじゃありませんか……

根岸 もちろんだとも……

教科書を提げて出ていく根岸。

千代田 ひとつお聞きしてもよろしいですか……

甲斐 おつかないなあ……

千代田 一兵卒になつたつもりでお答えください……例えば砲煙弾雨の戦地にいるとする……行軍の最中、部隊からはぐれ、朝鮮人の志願兵とふたりつきりになつてしまつた……さて、甲斐さんでしたら、奴さんのまえを歩きます、それともうしろを……？

甲斐 隣は……？

千代田 ピクニックじゃないんだから……

甲斐 じゃ、どっちにしようか……

千代田 かつてならあとをついていったかと……

甲斐 なぜ……

千代田 いうまでもない……朝鮮人に背中を見せないためです……且つ朝鮮人を弾よけにするため……

甲斐 僕はまえでもうしろでも……

千代田 それが聞きたかつた……そのことばこそ日本人の信を得た証しですので……ええ、我々は背後から弓を引く真似などしませんよ……むしろ勇んで醜の御楯となりましょう……ともに戦い、ともに散る……純然たる内鮮一体です……来る戦争でそれがなし遂げられるものと信じております……

甲斐 君だつたらどうする……

千代田 私だつたら……？

甲斐 まえか……はたまたうしろか……

千代田 当然、先に立ちますよ、皇国臣民となれるなら、命と引き換えにしても……

甲斐 もしや志願兵に……

千代田 ご名答……

甲斐 いずれ半島にも徴兵制が敷かれるだろう……慌てることはない……

千代田 じきに私も三十です……兵隊としてはとうが立ってる……

甲斐 教壇を降りると……？

千代田 国語は私の心を変えてくれましたが、血を変えることまではできません……血を変えらるには血を流さねばならないんです……

張本、戻ってくる。

張本 あれ、ここにもいねえか……彼女は……？

甲斐 ついさつき校長さんからお声がかかりまして……

張本 たたく性懲りもなく……おまえも気が気じゃないだろ……

千代田 はあ？……何だって私が……

張本 （呵呵大笑して）わかりやすいやっちゃ……

根岸、戻ってくる。

突如としてラジオが空電ノイズを響かせはじめる。切れ切れに交じる人の声。口を噤んでラジオを見守る一同。

根岸 直ったのか……

張本 まさか……

千代田 いや、でも……（教卓に歩み寄る）

根岸 （ラジオに耳を近づけ）何か喋（しゃべ）ってる……国語だ……

甲斐 （懐中時計をとり出し）ちょうど例の番組がやってますよ、『国語の時間』……

根岸がそのつまみをいじると、ぷつりと音が消える。

一同、落胆の溜め息を漏らす。

気まずそうに教科書を抱えて出ていく根岸。

千代田 ときにどうになりました、標準語の件は……

甲斐 存外、一筋縄ではいかないんですよ、地域によってことばがまちまちなんで……あまつさえ世代によっても、性別によっても、出自や階層によっても異なる……それをひとつにまとめるわけですから……

千代田 土台、無理な相談でしょ……

甲斐 国民を統合するためには欠かせません……

千代田 その鑄型に嵌めようにも嵌められないんです、日本のことばは……私たちが洋服着てめかしこむようなもので……合わないわけじゃない……似合わないんだ……

所詮、お仕着せなんです……

張本 じゃ、何を身につけりゃ……

千代田 着物があるではありませんか……

甲斐 やまとことばですか……

張本 「何とかそうろふ」だの「何とかなりけり」だの……？
 千代田 上御一人がお使い遊ばすおことはです……ことは魂の謂いならば、やまとのことはこそまさにやまとの魂……そしてまことの国語……天子さまの赤子たる者、やまとことばに立ち返るべきではないでしょうか……

千代田、教科書を提げて出ていく。
 入れ違いに根岸が戻ってくる。

甲斐 ことばなんてただの道具だと思えますけど……
 張本 道具？……身も蓋もありやしねえなあ……
 甲斐 似合おうが、似合うまいが、寒けりや着るし、暑けりや脱ぐ……
 張本 だからって人さまの身ぐるみまで剥ぎとるこたあ……
 根岸 油（あぶら）ぱっかり売ってないで……日が暮れちまうぞ……

教科書を抱えて出ていく根岸。

甲斐 すみません……これもいっしょに……
 張本 はいはい、かしこまりました……（窓辺に歩み寄る）
 甲斐 （教科書を手渡して）先ほどのことですが……
 張本 ……
 甲斐 黒板を見つめていらつしやいましたよねえ、思いつめた顔して……
 張本 落書きしようとしてたんじやないかって……？
 甲斐 正直におっしゃってください……
 張本 ええ、お察しの通りでございます……というとも……？
 甲斐 では、張本さんも一度、おいでいただけなんでしょうか、当局まで……
 張本 ふざけるんじやねえ……
 甲斐 手荒な真似はいたしませんよ……
 張本 俺ひとりだったんだぜ、朝鮮人は……疑われるに決まってらあ……それを承知で落書きするほど馬鹿じやない……
 甲斐 でしたら何をなさろうとしてたんです……どうして黒板を……
 張本 教師の性ってもんさ……

千代田、戻ってくる。

張本 おまえも気をつける……濡れ衣着せられるからな、黒板を眺めただけで……
 甲斐 人聞きの悪い……
 千代田 落書きですか……きつと焦っておられるんでしょう……
 甲斐 未だに犯人の目星もつかないありさまで、上からも何やかんやと……
 張本 とばつちりもいとこだ……

根岸、戻ってくる。

甲斐 （最後のひと束を積み上げ）はい、おしまい……

根岸 ああ、どうもお世話さまでした……お疲れになったんじゃありません？……中で休んでってください……お茶を淹れさせますから……
甲斐 では、おことばに甘えて……

荷車を引いて去っていく甲斐。

根岸 儂らもひと休みするか、この山が片づいたら……
張本 そう来なくっちゃ……

張本、教科書を提げて出ていく。

千代田 （直立不動で）教頭先生、お話が……

根岸 何だい、改まって……

千代田 ようやく腹が決まりました……

根岸 志願兵か……

千代田 ……（頷く）

根岸 そうかい……

千代田 あれ、もつと喜んでいただけるか……

根岸 何も自ら進んで行かなくなっちゃって……否が応でも連れていかれるだろうに……

千代田 己の意思で行かなければ、意味がありません……

根岸 君らしいなあ……誇りに思うよ……

千代田 ありがとうございます……

戸口に柳が立ちつくしている。心なしか虚ろな様子。

根岸 おお、ご苦労、ご苦労……

千代田 どうかしました、顔色が優れないようだけど……

柳 平気です……（窓際に歩み寄り）あら、ちっとも減っていないじゃありませんの

……（教科書を抱えて立ち去ろうとする）

千代田 （行く手を遮って）何かあったんじゃないです……

根岸 何かって……

千代田 いわれたか、されたか……

柳 いえ……

千代田 嘘のつけない人だ……

柳 （教科書を傍らに置いて）手を握られただけです……

千代田 ……（出ていこうとする）

根岸 おい……

千代田 さすがに黙っちゃいられませんよ……
柳 困ります……

根岸 余計なお世話なんだと……

千代田 そんな……

根岸 別段（ぺつだん）、気に障ったわけでもないだろう……
柳 ええ……

千代田 柳先生……

根岸 元も子もないしなあ、校長のご機嫌損ねて首（くび）を切られてしまつては……
ああ、辛抱、辛抱……肝心なのは辛抱さ……

教科書を提げて出ていく根岸。

千代田 余計なお世話でしたか……

柳 ごめんなさい……

千代田 何だか危なっかしくてね、先生を見ると……つい手を差し伸べたくなる……
柳 お気もちだけ……（教科書を抱える）

千代田 あの……

柳 はい……

千代田 つかぬことを伺いますが、先生はその……結婚に關しまして……

柳 結婚……？（ころころと笑う）

千代田 いや、忘れてください……聞かなかったことに……

柳 考えもしませんでしたわ、しようとも、したいとも、しなければとも……

千代田 約束した方がいるわけじゃ……

柳 約束だなんて……

千代田 すみません、立ち入ったことをお尋ねして……

張本、戻ってくる。

張本 何を約束したつて……

教科書を抱えた千代田、張本に一瞥をくれて出ていく。

張本 やつとだ……

柳 ……（立ち去ろうとする）

張本 逃げるこたあねえだろ、やつとふたりつきりになれたのに……

柳 （足を止める）……

張本 返事を聞かせてほしい……

柳 （声をひそめ）またにしませんか……どこで誰が聞いているやら……

張本 首を振るだけでいい、縦か横か……

柳 ……（首を横に振る）

張本 断られてばかりだな……

柳 ご期待に添えられませんか……

張本 単なる研究会だぜ……やましいことはしちやいないさ、お上に盾突くような真似は一切……辞書を編纂したり、方言を蒐集したり……慎ましいもんだよ……なあ、いっしょにやろう……君を見込んで誘ってんだぞ……祖国のことばを記憶した最後の世代なんだし、この世から消えてなくなっちゃったら……

柳 （教科書を机に置いて）お話ししましたよね、母のこと……

張本 ああ……

柳 （笑みを漏らして）近ごろ、おかしいんですの……思いこみといいましょうか……

自分は両班の箱入り娘だと……幼子に戻ったみたい……もう我がまま放題……例えば粥を匙で掬って……こう……口もとに運ぶ……その間合いが早かったり、遅かったりしただけで癩癩を起すんですよ……いちばん辛いのはお喋りの相手……おんなじ話を何十回と……しかもいちいち相槌を打たなきゃならないの、さもはじめて聞くようにね……そうして母の思い出を守っているんです……私にしかできっこありませんわ……

張本 オモニのそのことばもウリマルじゃねえかよ……

柳 忘れられるもんなら、忘れてしまいたい……

張本 たわけたことを……

柳 時折、わからなくなりますが、どちらのことばで生きているんだか……

張本 どちらのことばで……

柳 心はどちらのことばで思うのか……夢はどちらのことばで見るのか……子どものころからふたつのことばを行ったり来たりしてきましたので……ええ、先生とは違うんですよ……生まれたときにはもう祖国なんてありませんでしたし……

張本 さびしいなあ……

根岸、戻ってくる。

張本 あゝあ、ふられちまりましたよ……

張本、教科書を抱えて出ていく。

根岸 ふたりになるなといったろ……知らんぞ、変な噂を立てられても……

柳 たいした話はしていません……

千代田、戻ってくる。

千代田 （窓外を見て）ああ、もうあんなに日が傾いて……

根岸 おわったら、一杯やるか、鐘路（チョンノ）に繰り出して……

千代田 いいですねえ……

根岸 柳くんもたまにはどうだい……

柳 柳
では、ちよびつとだけ……
よし、俄然、やる気が出てきたぞ……

そこへ血相を変えた張本、足を引いて駆けこんでくる。

張本 落書き……

柳 落書き……？

張本 うちの教室に落書きが……

根岸 （鼻で笑って）下手な芝居（しばい）しやがって……

張本 この足で駆けてきたんですよ……それも芝居だと……？

根岸 おい、千代田くん……

千代田 はっ、はい……

千代田、飛び出していく。

根岸 （廊下に出て）甲斐さんに気づかれんようにな……

柳 春先でしたかね、このまえは……

張本 二月の紀元節に四月の天長節……だからあるいは今日もって……

根岸 （室内に戻って）何が書かれてるんだ……

張本 どうぞご自分の目で……

根岸 いやいやいや、とんでもない……

張本 恥ずかしいんですよ……

柳 恥ずかしい……？

張本 ああ、落書きを目の当たりにすると、恥ずかしくて堪らなくなるのさ……咎められてる気がしてね、きさまは卑怯だと……

動揺もあらわに戻ってくる千代田。廊下の様子を窺い、戸を閉めきる。

千代田 ……（頷く）

張本 ほくら……

根岸 ……（張本を見やる）

張本 俺じゃありませんよ……

根岸 何にもいっておらんのだろ……

張本 いい加減、うんざりなんです、ことあるごとに痛くもない腹を探られて……

根岸 そりゃまあ、噂が噂だけに……

千代田 しかも校内にいた朝鮮人は先生おひとり……

張本 誰にだってできるじゃねえか、教科書を運んでる隙に……

根岸 誰にだって……？

張本 誰にだって……（ひとりひとり指さす）

柳 （手を翳して遮り）よしませう……教員がやったとは限りませんし……ええ、

そうですねわ……おおかたよその人が忍びこんで……

不穏な沈黙。

根岸 消そう……

張本 またですか……

根岸 きれいごとといったる場合（はあい）か……

千代田 これ以上、恥を晒すわけにはいきません……

柳 一刻も早く……

張本 君まで……

根岸 構わんよな……

張本 はあ……？

根岸 おまえが書いたんでなければ、消しても惜しくはないはずだ……

張本 お好きなように……いや、俺も消しますよ、疑いを晴らせるもんなら……

根岸 柳くんは残っていなさい、誰もいないと怪しまれるから……

根岸に続いて千代田、駆け去っていく。

張本 ウリマルを残そうといったそばから消していく……

柳 しかたがありません……

張本 そういつてくれると気休めにはなる……

柳 自分にいい聞かせているんです……

張本、重そうに足を引きずって出ていく。

手近の教科書を繰る柳。気をまぎらそうとしているのかもしれない。そぞろに歩を進めながら、黙読する。『小學 國語讀本 卷十』。

「第五 水兵の母」

明治二十七八年戦役の時であった。或日、我が軍艦高千穂の一水兵が、手紙を読みながら泣いてゐた。ふと通りかゝつた某大尉がこれを見て、餘りにめゝしい振舞と思つて、

「こら、どうした。命が惜しくなつたか。妻子がこひしくなつたか。軍人となつて、軍に出たのを男子の面目とも思はず、其の有様は何事だ。兵士の恥は艦の恥、艦の恥は帝國の恥だぞ。」

と言葉鋭く叱つた。

水兵は驚いて立上つて、しばらく大尉の顔を見つめてゐたが、やがて頭を下げて、「それは餘りなお言葉です。私には妻も子もありません。私も日本男子です。何で命を惜しみませう。どうぞ、これをこらんなさい。」と言つて、其の手紙を差出した。

大尉がそれを取つて見ると、次のやうな事が書いてあつた。

「聞けば、そなたは豊豊沖の海戦にも出でず、又八月十日の威海衛攻撃とやらにもかく別の働なかりし由、母は如何にも残念に思ひ候。何のために軍に出で候ぞ。一命を捨てて、君の御恩に報ゆるためには候はずや。村の方々は、朝に夕に、いろいろとやさしくお世話なし下され、『一人の子が御國のため軍に出でしことなれば、定めて不自由なる事もあらん。何にても多しりよなく言へ。』と、親切に仰せ下され候。母は其の方々の顔を見る毎に、そなたのふがひなき事が思ひ出されて、此の胸は張りさくるばかりにて候。八幡様に日參致し候も、そなたが、あつばれなるてがらを立て候やうとの心願に候。母も人間なれば、我が子にくしとはつゆ思ひ申さず。如何ばかりの思にて此の手紙をしたゝめしか、よくくお察し下されたく候。」

大尉はこれを読んで思はず涙を落し、水兵の手を握つて、
「わたしが悪かつた。おかあさんの精神は感心の外はない。お前の残念がるのもつともだ。しかし、今の戦争は昔と違つて、一人で進んで功を立てるやうなことは出来ない。将校も兵士も、皆一つになつて働かなければならない。すべて上官の命令を守つて、自分の職務に精を出すのが第一だ。おあさんは、『一命を捨てて君恩に報いよ。』と言つてゐられるが、まだ其の折に出會はないのだ。豊豊沖の海戦に出なかつたことは、艦中一同残念に思つてゐる。しかし、これも仕方がない。其中に、花々しい戦争もあるだろう。其の時には、お互に目ざましい働をして、我が高千穂艦の名をあげよう。此のわけをよくおかあさんに言つてあげて、安心なさるやうにするがよい。」

水兵は頭を下げて聞いてゐたが、やがて手をあげて敬禮し、につこりと笑つて立去つた。

廊下から顔を覗かせる丸尾。沈鬱な面もち。相変わらず薄汚い身なりだ。

柳 （顔を上げて）丸尾さん、どうなさいました……講習会は……

丸尾 ええ……

柳 でもちようどよかつたわ……いいお知らせがございますのよ……〈国語の家〉に選ばれたんです、丸尾さんのお宅が……

丸尾 〈国語の家〉……？（室内に入ってくる）

柳 （戸を閉めて）おうちでも国語を話しておられるから……

丸尾 （首を振り）私のうち、〈国語の家〉じゃないよ……先生、ご存じてすよねえ……

柳 いや、まあ……

磨りガラスの向こうに人影。

丸尾 哲、明日、学校行きません、明日の明日も、明日の明日の明日も……

柳 それはどういう……今日も元氣そうでしたけど……

丸尾 やめるてす……

柳 えっ……

丸尾 すみません……

柳 なぜ……

丸尾 わかるでしょう……

柳 働かせるんですの、まだ五年生の子どもを……

丸尾 私は六歳働きました……あいちゅはもう十二歳……

柳 卒業までほんの一年じゃないですか……せめてそれからでも……いいえ、無理に働かなくなつて……高等科に進むこともできますし……哲くんもそう……

丸尾 先生、私の仕事知っていますか……

柳 ……（頷く）

丸尾 日本人のブンニョ（糞尿）、高い、高く売れる……いいもの食べて、いい肥やし

なるから……たけと鑑札（かんしゃちゅ）ないので、私、汲みとりてきません……

朝鮮人の家だけ……ブンニョも安い……たからいっばい集（あちゅ）めない……

柳 桶がみつちゅ、よつちゅ……ひとり運べないですよ……

丸尾 ご苦労はお察しいたしますが、今、必要なは教育なんです……勉強しなければ、

何にも変わりませんもの……大人になつても、おんなじ仕事をしているかもしれ

ない……そんなこと望んではいらつしやらないでしょう……お子さんにはご自分

より幸せになつてもらいたい……そう願つておられるんじや……

丸尾 哲、偉くなつてほしい、いちばん偉い人……朝鮮総督に……

柳 でしたらもつと勉強に励みませんか……

丸尾 学校やめる……本当の気もちじやありません……私も嫌です……でも……

柳 でも……？

丸尾 あいちゅ、昨日、隣から林檎盗（ぬしゅ）みました……ええ、もう無理ですよ……

柳 ……

丸尾 ……（頭を下げ、立ち去ろうとする）

柳 丸尾さん、考え直していただけませんか、何とかいたしますので……

丸尾 助けてくれますか……

柳 できる限り……

丸尾 じゃ、学校のお金払ってください……

柳 いや、あの……そういったことまでは……

丸尾 冗談（じょうたん）……お金ありません……お金よりオモニほしい……

柳 はい……？

丸尾 あいちゅのオモニ……

柳 私が哲くんのお母さんに……？

丸尾 哲、オモニない……たからさみしい……たからウリマル話しません……たから

……先生、哲のオモニなつてください……（床に跪いて）お願いします……

柳 （首を振る）……

丸尾 駄目ですか……

柳 ……

丸尾 （躍り寄り）白丁だから？……私たち、白丁だからでしょ……

柳、丸尾から顔を背けた拍子に人影に気づいたようだ。勢いよく戸を開け放つ。
虚をつかれて立ちつくす甲斐。

柳 甲斐さんでしたか……

甲斐 あつ、いや……たった今……（室内に入り）ああ、いつぞやの……

丸尾 ……（立ち上がる）

甲斐 あれ、みなさんは……？

柳 （戸を開めきり）教員室でひと休み……まだこんなにも残っておりますのに……

甲斐 校長さんにご挨拶してきたんだけど、どなたもおられなかったぜ……

柳 何をなさってるのかしら……探してきます……

甲斐 いいよ、いいよ、すぐに帰るから……

丸尾 先生、水（みじゆ）もらえませんか……

柳 お水……？

丸尾 喉（のど）からから……あなたもいかがです……

甲斐 私はもう……

丸尾 汗（あし）びっしょりですよ……ふたちゆください……

柳 はい……

教室を出ていく柳。

丸尾、甲斐の顔を食い入るように見つめる。

丸尾には目もくれず、教卓に歩み寄り、ラジオを矯めつ眇めつ眺める甲斐。

丸尾 光照……（甲斐に近づいていく）

甲斐 ……（手を止める）

丸尾 光照たろ、朴光照……

甲斐 （顔を上げる）……

丸尾 アイゴ……光照た、光照……

甲斐 どうやら人違いをされてるようで……

丸尾 ひとちがい……？

甲斐 私は甲斐壮一郎と申します……たしか以前にもそう……

丸尾 ……（懐から甲斐の名刺をとり出す）

甲斐 他人の空似ですよ……実はよくありまして……トンネル工事で生き埋めになった

甥っ子だろうとか、旅順で戦死した倅じゃないかとかね……幽霊でもあるまいに

丸尾 ……

丸尾 いいや、おまえは朴光照、俺は洪仁煥……昔、友たちだった……ああ、いちゆも

いしよに遊（あし）んたよ……河原で石を……こう……（水切りの真似を繰り返す）

やつて見せて）そうそう……橋もちゆくたな、石の橋……川に石ころたくさん……

橋があれば、遠く行けるからって……思い出（た）したか、光照……

甲斐 つき合ってられませんか……（出ていこうとする）

丸尾 光照……（行く手を遮る）

甲斐 勘弁してください……

丸尾 みんないったよ、光照は死んだ、光照は死んだ……（首を振って）嘘（うしよ）……

丸尾 光照は生きている……ここに……嬉しいよ……アイゴー……

甲斐の肩を掴み、涙に咽ぶ丸尾。

甲斐 そんな出鱈目ぬかすために国語を学んでんのか……

甲斐、丸尾を力任せに殴り飛ばすと、札入れから抜きとった数枚の紙幣を放る。
訝しげに、そして悲しげに甲斐の顔を見上げる丸尾。

甲斐 勘違いするんじゃないよ……息子さんのためだよ……国語ができりや、自ずと道は

丸尾 拓く……総督府の高官にだつてなれるさ、將軍にも大臣にも……

甲斐 ほら、誰か来るまえに……

丸尾 あなたは朝鮮人じゃありません……白丁じゃありません……（床に這いつくばって

紙幣をかき集める）

甲斐 それでいい……

丸尾 （嗚咽を漏らして）光照は死にました……（名刺を握り潰す）

張本、戻ってくる。

張本 あれ、丸尾さん……

甲斐 （ラジオを見て）案の定、コンデンサーが……近々、また出直します……では……

教室をあとにする甲斐。

張本 何が……

丸尾 ……（首を振るばかり）

窓外に日野が姿を現す。

張本 オモニ……

日野 忘れました……（教科書を差し出す）

張本 わざわざ引き返してきたんです……？

日野 柳先生、困りますよ……

張本 教科書なんぞ掃いて捨てるほどあるんだから……まっ、お茶でも飲んでってください……我々もちようど一服しようかと……（電灯をつける）

教室がほんのりと橙黄色に包まれる。

日野 （丸尾を認めて） 仁煥……洪仁煥……

丸尾 誰（たれ）……

日野 貞順ですよ、韓貞順……松汀里（ソンジョンニ）の……

丸尾 光熙のオモニ……

張本 何だ、お知り合いましたか……

丸尾 どうして京城います……

日野 光熙探す……

丸尾 光熙……

日野 知りませんか……

丸尾 （首を振って） 光熙は死んたです……

日野 みんないう、光熙は死んだ……私、信じません……光熙は生きています……

お茶を載せた盆を手に戻ってくる柳。

柳 あら、日野さん、何だってこんな時間に……（盆を机に置く）

張本 届けてくださったんだ……（教科書を掲げる）

柳 よろしいんですか……

日野 ……（首を振る）

柳 では、こちらをお使いください、新しい教科書……

日野 ありかどごじやいます……もつと勉強（ぺんきよ）しますよ……

日野、踵を返す。たちまち夕闇にまぎれていく。

丸尾 哲、明日、学校行きます、明日の明日も、明日の明日の明日も……

柳 考え直していただけましたの……よかった……

丸尾 もう心配はいりません……

逃げるように教室をあとにする丸尾。

張本 一体、どうしたんだよ……

柳 いえ、その……ん……？

張本 えっ……

柳 何か聞こえませんか……（教卓を指さし）あちらのほうから……

張本 ラジオじゃねえか……

柳 泣き声……

張本、教卓に駆け寄って覗きこむ。

張本 哲……

やがてラジオが大東亜（太平洋）戦争の開戦を報ずるであろう。

ラジオ

臨時ニュースを申しあげます、臨時ニュースを申しあげます……大本営陸海軍部
十二月八日午前六時発表、帝国陸海軍は今八日未明、西太平洋においてアメリカ
イギリス軍と戦闘状態に入れり……

3

一九四三（昭和十八）年三月下旬のある日。午前十時ごろ。

六年三組の教室。

習字の書の文言（「歴代神靈加護」）が時の移ろいを感じさせるものの、室内の様子は
さして変わっていない。違いといえば、教卓に花が飾られ、隅に達磨ストーブが置かれ
ていることくらいだろう。

窓外では雪が降りしきっている。一面、真つ白。

廊下をこけつまろびつ走ってくる足音。戸口のまえを人影が横切る。張本だ。死にも
狂いの形相。追われているのかもしれない。

しばらくすると教卓の下から丸尾がひょっこり顔を出す。例によってその風体はみすば
らしい。寒さが堪えるか。体を震わせている。

遠くかすかに『君が代』の斉唱。

丸尾 ……

廊下を覗いて誰もいないことを確かめ、戸を閉めきる丸尾。思いつめた足どりで教壇に
登ると、白墨を手にとり、黒板に大きく文字を書く。「そつきよ おめ」。教卓の上の
教科書を手本に一字一字、声にしながら。

丸尾 そ・ちゆ・ぎ・よ……お・め……

ミミズがのたくったような字だ。

またもや足音。

丸尾、慌てて教卓に隠れる。

丸尾 ……

そこへ足を引きずって飛びこんでくる張本。戸を閉めるや否や、窓辺に駆け寄り、錠を
外して身を乗り出す。外へ逃げるつもりだろう。しかし追っ手の姿を認めたのか、体を

引いてしゃがみこむ。身に纏った礼服がすっかり着崩れている。

張本
……

窓外に千代田が現れる。おなじく礼服姿。雪に煙った校庭を見渡す。

千代田 張本先生、もう逃げられませんよ……観念してください……

窓越しに室内を覗く千代田。黒板の文字に目をとめながらも、死角になっているため、張本には気づかない。開けっ放しの窓を閉め、軒下沿いを去っていく。

張本
……

胸を撫で下ろしたのもつかの間、廊下側に目を向け、耳を澄ます張本。近づいては消える足音、戸を開け閉めする音。教室を順繰りに調べているようだ。張本、箒を掴んで戸口へ歩み寄り、息を殺して身構える。

張本
……

やがて教室の真んまえで足音がやみ、戸が開け放たれる。もう一方の戸口だ。眼光鋭く室内を見回す男。金村尚之助（金尚憲）、三十九歳。京城鐘路警察署高等係に奉職する警官。制服の代わりに紋付袴を纏っている。

金村
……

金村が敷居を跨ごうとしたそのとき、廊下の奥から呼びかけられる。根岸だ。

根岸 （声）おりましたか……

金村 （振り返り）いやあ、うしろ姿は見かけたんですけど、逃げ足が速くて……

根岸 （声）ということはまだ校内に……

金村 ええ、あの洋服……奴さんでしょう……

根岸 （声）今日のために逃えたそうですよ、本町の仕立て屋で……

根岸、戸口のまえに現れる。おなじく礼服姿。

根岸 それにしてもとんだ騒ぎに……

金村 卒業（そちゅぎょう）式がおわり次第（したい）、検束する手筈（てはじゆ）になってたんですが……

根岸 申しわけありません……

金村 我々も迂闊（うがちゆ）てしたよ……まさかとんじゆらするとは……感ぢゆいたの

根岸 かもしれないね、張りこみに……
 根岸 くれぐれも児童には悟られないよう……存外、人気がありますので……
 金村 らしいてすなあ……
 根岸 じゃ、私は念のため校庭をぐるりと……
 金村 いえ、もう……どうぞお戻（も）りください……
 根岸 金村さんひとりにお任せしては……
 金村 （廊下の窓から外を見渡し）うちの連中が校舎を包囲しておりますから……袋の鼠（ねじゅみ）てす……
 根岸 先にひっ捕らえてみせますよ、私どもが……

引き返そうとする根岸。

金村 ちゆかぬことをお聞きしますけど、倅の教室（きょうしちゆ）はどちらでしよ……
 根岸 倅……？
 金村 金村誠……たしか六年六組……
 根岸 ああ、お父さまでありましたか……いや、そうとは知らず……何しろ金村だけで三十名はおりますので……
 金村 いちばん出来（て）きの悪い金村です……とくに国語はからつきし……毎日、札（ふた）ぶら下げて帰ってくるんてすよ、五枚も十枚も……
 甲斐 お父さまは達者なのに……
 金村 同級生（とうきゅうせい）に意地悪な奴（やちゆ）がいますね……ついぼろつとあれしたたけて……おい、朝鮮語を喋（しゃべ）ったろうって官憲みたいな真似を……親の顔が見たいてすよ……
 根岸 ともあれおめでとうございます……（頭を下げる）
 金村 （頭を下げ）ありがとうございます……
 根岸 ここが三組ですから、四の五の六組……あちらがお子さんの……
 金村 ちゆまり張本の……
 根岸 受けもちの学級です……

根岸、踵を返して去っていく。

金村 ……
 金村、改めて室内を睨め回すと、戸を開けて隣の教室へ足を運ぶ。

張本 ……
 大きく息をつく張本。ふと黒板に目をやり、思わず顔を綻ばせる。忍び足で教卓に歩み寄ると、教科書を手にとって呟くように読みあげる。『小學 國語讀本 卷十二』。

「第二十五 雪國の春」

せり摘み

桑島の雪も大分へつて、あちらこちらに黒ずんだ島の土があらはに出てゐる。ずつと向こふには、川べりに並んだはんの木が目立つ。一だんと大きなはんの木の間に、かぶつた白い手拭が見える。

「おかあさん。」

弟が大きな聲で呼んだ。立つてしばらくこちらを見てみた母が、左手をあげた。弟がかけ出した。僕も弟の後を追ふ。近づいてからまた弟が、

「おかあさん。」
と言つた。

三四百米も走つたので、あつくてたまらない。上着を取つて、はんの木の**下枝**にかけた。川の少し上手に、よそのをばさんもせつせとせりを摘んでゐる。僕等を見てにつこりしたので、僕は帽子を取つておじぎをした。

清水の流だといふ此の川べりは、もう殆ど雪がなくなつて、雑草が一面に芽ぐんでゐる。草の芽の間から立上る水蒸氣のかけもなつかしい。

何時の間にか向かふ側に行つた弟は、土遊びに餘念がない。母は時々弟の方を見ては、またせりを摘む。母の指先が水にはいると、川底のせりの緑も、高いはんの木の影も、ゆら／＼揺れて一つになる。

僕も、長靴をはいたまゝ下手の浅瀬にはいつた。足もとからむく／＼と濁つて湧上つた水が、すぐに流れ澄んで、せりの葉並が一そう美しく見える。手を入れる。水は思つたより冷たかつた。澄んだ水の色、川べりの黒い土、草の芽の緑、此の三四箇月土を見ることの出来なかつた目には、皆たまらなくなつかしい。大自然は、今春の喜びと活動によみかへらうとしてゐるのだ。僕は、もうぢき訪れる春を考へながら、あたりを見廻した。

晴渡つた空に、正午を知らせる町のサイレンが長々と響いた。

張本、朗読の途中で教科書を閉じ、教卓に目を向ける。

張本 (声をひそめ) 丸尾さん、いらつしやるんでしょ……

……(教卓に頭をぶつける)

張本 お静かに……

(おずおずと顔を覗かせる) ……

張本 もうはじまつてますよ、卒業式……息子さんの晴れ舞台、見届けてあげませんと……ご存じですよね……答辞を読みます、卒業生を代表してお礼の挨拶を……

丸尾 哲、来るなといいました……

張本 えっ……

丸尾 恥じゆかしいから、来ないでくれと……

張本 恥ずかしい……?

丸尾 お父さん汚い、臭(くしき)い、国語下手くそ……

丸尾 やぱりいいですよ……いらないてす……

張本 哲くんのためじゃありませんか……さあさあ……

丸尾 私、洋服はじめて……

張本 （丸尾の着替えを手伝いながら）逆さま……そっちは右ですよ……箸をもつほうの手

……そう……左も……まだまだ……先にボタンをかけませんと……ほら、急いで……何だ……かじかんじまったのか……（丸尾の手をとり）ひどいなあ……いや、俺がやりますんで……その間に……だから逆さま……そっちは左ですよ……はい、足上げて……うん……これでよしと……

丸尾 はあ……（満更でもない様子）

張本 よく似合ってます……もう恥じるこたあない……

張本に背中を押されて廊下に出た丸尾、血相を変えて戻ってくる。

丸尾 来る……光照来る……

張本 光照……？

丸尾 光照じゃない……甲斐さん……

慌てふためくふたり。張本は教卓に潜り、丸尾は教壇に立って祝福のことばを綴る。

戸口に姿を現す甲斐。モーニングコートに身を包んでいる。

甲斐 あなたか……

丸尾 （振り返って）ああ、こんにちは……

甲斐 てつきり張本さんかと……お見かけしませんでした……？

丸尾 張本先生……？（首を振る）

甲斐 そう……（室内に入ってくる）

丸尾 ……（甲斐に背を向ける）

甲斐 それは……？

丸尾 （文字を認めながら）お祝いのことば……

甲斐 お召し物ですよ……ずいぶん上等な代物じゃありませんか……

丸尾 本町（ほんちよ）て買いました……

甲斐 ほほお……

丸尾 （再び振り返り）お金あります……毎月（まいちゆき）、甲斐さんくれるから……

甲斐 たとえ冗談でも滅多なことはいわないように……壁に何ちゃらつてね……

丸尾 ……

甲斐 （教卓に目を据えて）いらつしやるんでしょ、張本さん……

丸尾 いない、いない、いない……

甲斐 臭いは消せませんよ……（教卓に歩み寄ろうとする）

廊下を足早にやってきた柳、人影を認めて入ってくる。艶やかな着物姿。

柳 あら、丸尾さん……来てくださったんですね……

丸尾 ああ、ええ……

柳 ずっと渋っておられましたのよ、何遍、お誘いしても、忙しいの一点張りで……

丸尾 （窓外を見て）今日は仕事できませんから……

柳 それにしては素敵な……本当は哲くんを驚かすおつもりだったんじゃない……

丸尾 いや、これは……（上着を脱いで丸める）

甲斐 親心つてもんですよねえ……さあ、早いところ行ってやりませんか……ついでに

柳 案内してさしあげな……

柳 ついでにつて……

甲斐 卒業生の担任だぜ、君は……席を外してちや……オルガンも弾かなきゃならねえ

柳 なんだしさ……『仰げば尊し』だっけ……

柳 ですからそれまでに張本先生を……恐れ入りますが、講堂はあちらですので……

甲斐 （立ち去ろうとする）

甲斐 待て……

甲斐、柳の腕を掴んで窓辺に連れてくる。

甲斐 実は官憲が動いてるんだ……（校庭に目を凝らし）ほら、あそこにひとり、あそこ

柳 ……

甲斐 おわかり？……先生方が出る幕じゃないんだよ……

柳 私たちの手で捕まえませんと……

甲斐 どうして……

柳 離してください……

甲斐 だからどうして……命令されたのか……

柳 いえ、私たちの意思です……（甲斐の手を振り払う）

甲斐 ……

柳 その目……

甲斐 えっ……

柳 訝しそうな……ですからこんなことしなくちゃならないんですよ……

甲斐 （窓外に目を逸らし）あそこにもひとり……

柳 祝辞を読まれるそうですね、総督の名代として……

甲斐 ああ……

柳 甲斐さんこそお戻りになったほうがいいんじゃないかしら……あくまで私たちの問題ですし……あまり深入りなさらずに……

甲斐、窓辺を離れ、戸を閉めきる。

甲斐 話を聞きたい……

柳 お聞かせしてよろしければ……（丸尾をちらりと見やる）

甲斐 わかりやしねえさ……

丸尾 ……

甲斐 張本さんの容疑については……？

柳 (首を振る) ……

甲斐 それでよく警察の真似事ができるもんだ……

柳 …… (出ていこうとする)

甲斐 (行く手を遮り) そんな格好じや追いかけてもできやしない……

柳 ……

甲斐 知ってるだろ、例の事件は……この秋、世間を騒がせた……

柳 朝鮮語学会……

甲斐 察しはついてるみたいだな……

柳 独立運動を企てていたとか……

甲斐 まあ、真偽のほどは定かでないがね……いずれにしても野放しにできねえから、

柳 そんな連中……ハングルなどに恋々としてるような……

柳 先生も……？

甲斐 仲間だったのさ……

柳 ……

甲斐 君は……？

柳 私？……まさか……

甲斐 誘われたろう……

柳 残念ながら……

甲斐 嘘だね……

柳 なぜ……

甲斐 僕ならほつとかない……

柳 はあ……？

甲斐 返事は……？

柳 誘われてもいませんに……

甲斐 誘われたら……？

柳 意味のない質問です……

甲斐 興味はある……

柳 とうに忘れてしまいましたわ、朝鮮語なんて……

突然、戸が開けられ、千代田が姿を見せる。

千代田 こちらでしたか……探したんですよ……

柳 私を……？

千代田 ええ……いや、張本先生……どこに隠れてんだか……

体中に雪を被った根岸、軒下に駆けこんでくる。

根岸 （窓を叩いて）開けてくれ……

柳 教頭先生……（窓を開け）お入りください……

根岸 表にいるかもしれないだろ……

甲斐 それどころじゃないでしょうに……式典の進行は教頭さんのお役目じや……

根岸 代わりはいくらでもおりますんでね……（丸尾を認めて）ん……？

柳 丸尾さんです、哲くん……

根岸 ああ……

丸尾 はじめまして……息子お世話（しえわ）なりました……（頭を下げる）

千代田 式にはお出にならないんですか……

丸尾 ……（首を振る）

甲斐 ずっとこんな調子でして……（教壇を指して）降りようともなさらないんです……

丸尾 （振り返って黒板を見やり）これ書いたら、行きます……

柳 おわっちゃいますよ……

根岸 儂らもそのまえに始末をつけんとな……

千代田 校内は風潰しに見て回ったんですが……

柳 教卓は……？

甲斐 抜かりなく……

根岸 うくん……

甲斐 ほかにありませんか、かくれんぼに打ってつけの……

千代田 納屋、便所……それに鶏小屋……

柳 奉安殿……

根岸 奉安殿って……ご真影と教育勅語が納められておるんだぞ……よもやそんな不埒

柳 な真似……

千代田 やりかねません……（出ていこうとする）

柳 いや、私が……足もとが悪いですし……

柳 へっちゃらです……

柳、着物の裾を端折り、小走りに去っていく。

甲斐 （懐中時計をとり出して）そろそろですかね、卒業証書の授与……

根岸 すまんな、最後の卒業式だったのに……

千代田 気になさらないでください……

甲斐 最後といますと……

根岸 本日をもちまして退職するんですよ……

千代田 以前、お話ししましたよね……

甲斐 やはり志願兵に……

千代田 まずは訓練所に入りまして……ゆくゆくは……

根岸 千代田くんのことです……必ずや勇敢なる皇軍兵士となりましょう……

甲斐 本当にいいのかい……

千代田 野暮なことを……

甲斐 卒業式さ……最後なんだろ……

千代田 はじめて受けもった子たちなんですがね、今日、卒業するのは……みんな大きくなりましたよ、入学したころはこれくらいだったのに……顔立ちもすっかり大人びて……もはや思い残すことはありません……

甲斐 そうまでいうなら……

千代田 それより張本先生です……懲らしめてやらないと……私たちにしてみれば、墓を暴かれたようなもんだから……

甲斐 ……？

千代田 朝鮮語が葬られた……その屍を掘り返したんです……おまけに蘇らせようと……静かに眠らせておきやいいものを……罰当たりな……

根岸 ああ、思い知らせてやろう……

千代田 じゃ、私は教員室のあたりをもう一遍……

千代田、教室を出ていこうとするも、踵を返して窓辺へ。

千代田 あの、折り入ってお頼みしたいことが……

根岸 何だね……

千代田 （懐から封書を取り出し）これを柳先生に……この分だとゆっくり話をする暇もなさそうですので……しばらくは顔を合わせる機会も……

根岸 よしきた……（封書を受けとる）

千代田 よろしくお願いします……

一礼して教室をあとにする千代田。

根岸 それでは私も……

甲斐 ……（窓から手を差し出す）

根岸 何か……

甲斐 しらばっくれちゃって……

根岸 ……（懐から封書を取り出す）

甲斐 筆跡を確かめませんと……

根岸 もう十分（じゅうぷん）では……きつと国語でしょうし……

甲斐 念には念を……

根岸 しかし……ものがものですから……

甲斐 中身に関心はございません……

根岸 これっきりにしてください……

窓越しに封書を受け渡す根岸と甲斐。

根岸 老婆心（ろうばしん）ながら、あえてお耳に入れておきます……柳くん、校長の妾になりましてね……

甲 斐 えっ……

根 岸 ……（笑みを漏らす）

甲 斐 またまた……そんな根も葉もない……

根 岸 きれいな着物を着ておったでしょ……校長からちようだいしたものです……この

ご時勢にいかげなもんかと思えますが……

甲 斐 何だっつて妾なんか……

根 岸 私に聞かれましたも……

甲 斐 ……

根 岸 我々には決まってふたつにひとつしかありません……そのひとつを選んだまでのこと……生きていくためにね……実際、暮らし向きはよくなったみたいだし……お袋さんの薬代を賄えるようにも……そつとしいただけませんか……

根 岸、窓を閉め、軒下沿いを去っていく。

甲 斐 丸尾さんも……ほら、上着を着て……

丸 尾 ……（礼服を纏うも出ていこうとしない）

甲 斐 強情な人だ……どうなっても知りませんよ……何とでもいえますんでね、お尋ね者を匿っていたとか……

丸 尾 ……

甲 斐 （教卓を見据え）張本先生、見つけた……

張 本 （声）待ちくたびれたよ……

丸 尾 先生……

甲 斐 庇うことはありません、あなたを身代わりにしようとしたんだから……

丸 尾 みがわり……？

甲 斐 教えないほうがいいか……

張 本 （声）さつさと捕まえやがれ……

甲 斐 私はただの小役人です……そんな権限ありやしません……

張 本 （声）だったら……

甲 斐 二三、伺いたいことがあります……

張 本 （声）また落書きかよ……

甲 斐 それもひとつ……

張 本 ……

甲 斐 （机の間を縫って歩きながら）ご承知の通り、戦争がはじまってこの方、落書きは増加の一途を辿っております……とりわけここ数ヶ月……そう、朝鮮語学会の事件が表沙汰になってからというもの、夥しいことばが残されてきました……しかしそれが誰の声なのか杳として知れません……

張 本 （声）俺に罪を被せりや、丸く収まる……

甲 斐 構わないんですか……

張 本 （声）いつものことさ……

甲 斐 （大きく息をつき）一件落着……これでようやく上司に顔向けできます……

教壇に歩み寄る甲斐。花瓶を手にとると、間髪を容れず教卓を蹴飛ばす。
張本、呻きをあげる。
甲斐に気圧され、立ちすくむ丸尾。

甲斐 私は真実が知りたいんです……

張本 ……

甲斐 張本さんの考えをお聞かせください……

張本 （声）密告しろと……？

甲斐 話が早い……

張本 （声）逃がしていただけるなら……

甲斐 お生憎さま、とり引きする気はございません……白状しようがしまいが、当局に引き渡します……

張本 （声）じゃ、やゝめた……

甲斐 学校は守ってくれませんが……それどころかとかげの尻尾を切って済ませようとしております、朝鮮人が先頭に立って……白を切る義理などないはず……

張本 （声）神かけていおう……さっぱりわからん……

甲斐 ……（花瓶を教卓に戻す）

張本 （声）本当だって……筆跡をあれしたこともあるんだから……誰かさんは未だにやってるようだけど……

甲斐 教員の仕業ではないと……

張本 （声）とつくに気づいてるんだろ……

甲斐 いや、でも……ほかに考えられません……

張本 （声）もう諦めな……

甲斐 間違いないんです……ええ、この学校に……

張本 （声）よしんばとつ捕まえても、落書きは跡を絶ちやしねえよ……

甲斐 犯人はひとりじゃない……？

張本 （声）ある意味……

甲斐、苛立ちまぎれに再び花瓶を掴み、教卓を蹴飛ばすと、机に腰かける。

甲斐 朝鮮語学会に関してお尋ねします……辞書の編纂だの、方言の蒐集だの……何のためにそのようなことを……十年もすれば、誰も話さなくなるんですよ、朝鮮語

なんぞ……三十年もすれば、誰も話さなくなる……

張本 （声）だからさ……いずれは消えちまうことばだから……

甲斐 （笑みを浮かべ）消えるもんなら、消えればいい……

張本 （声）せめて文字に残しておかねえと……

甲斐 文字を見たら、思い出してしま……

張本 （声）思い出してくれるかな……

甲斐 いや、ことばを思い出すんじゃないかもしれません……ことばを失ったという事実を思い

出すんですよ、文字を目にすると……読めませんから……どうして失くしたのか……その記憶を蘇らせてしまうんです……

張本 （声） どうして……お宅らが奪ったんじゃないか……
甲斐 代わりに国語をさしあげたでしょ……

張本 （声） 何をいつても、白々しいんだよ……
甲斐 白々しい……？

張本 （声） 楽しいとか、辛いとか、恋しいとか……「こんにちは」や「さよなら」でさえ……ことばが嘘だと、心が嘘になるのさ、俺自身まで嘘に……

甲斐 そういうあなたがいちばん達者ですが……

机から降り、せかせかと室内を歩き回る甲斐。

甲斐 おしまいにひとつ……なぜ逃げなかったんですか……

張本 （声） なぜ……

甲斐 当然、掴んでましたよね、同志が芋蔓式に検挙されたことは……次は自分の番だ……誰だってそう考える……なのになぜ学校にとどまったんです……逃げようと思えば、いつでも逃げられたでしょうに……

張本 （声） 見届けたかったんだよ、卒業式……

甲斐 それだけのために……？

張本 （声） ああ……

甲斐 ただそれだけのために……？

張本 （声） あと一日……いや、半日待つてくれたなら……

甲斐 待つてくれたんですがねえ……

張本 （声） えっ……

甲斐 お巡りさんも人の子なのか……式がおわるまで待つてやろうと……見届けられたんですよ、逃げ出しさえしなければ……

張本 （声） 馬つ鹿みてえだなあ……まつ、逃げた俺が悪いんだけど……ほら、お巡りさん呼びな……

甲斐 最後に先生とお話しできてよかった……

甲斐、教卓に向かって軽く頭を下げ、出ていこうとする。

丸尾 やめろ……

甲斐 （立ち止まる）……

丸尾 警察（けいしやちゆ）、駄目……張本先生捕（ちゆか）まえたらいけません……

張本 （声） いいんですよ、丸尾さん……（教卓から出ようとする）
（張本を押しとどめて）先生……

丸尾 （声） 平気、平気……はじめてじゃありませんし……
張本 先生、大切（たいしえちゆ）な人……私と哲の恩人です……

張本 （声） 俺は何にも……

丸尾 先生、名前を考えてくれました……国語も教えてくれました……おかげで日本人なれたですよ、先生のおかげで皇国臣民に……

張本 （声）よしてください……

丸尾 先生は賢い、先生は優しい、先生は偉い、先生は……

甲斐 残念ながら、張本さんがいかに素晴らしい教師だろうと、罪は帳消しにできないんです、罰を受けない限り……

丸尾 私、みんなにいます……

甲斐 はい……？

丸尾 （甲斐を指さして）この人は日本人じゃありません……朝鮮人です……甲斐さん

丸尾 じゃありません……朴光熙です……

甲斐 何をいうかと思いきや……

丸尾 名前も書けます……

丸尾、黒板に向き直ると、祝福のことばを消し、「パクガンヒ」と大きく書く。

張本 （声）いやあ、まさかあんたが……

甲斐 （呵呵大笑して）そんなわけないでしょ……丸尾さんの思い過ごし……

丸尾 正直（しよじき）いつてくたさい……

甲斐 私は甲斐壮一郎……正真正銘、日本人です……

丸尾 違う……おまえは朴光熙、俺は洪仁煥……昔、友たちたつた……ああ、いちゆもいっしよに……光熙、忘れたか……俺を忘れたか……

甲斐 子ども時分の話ですよねえ……

丸尾 ……（頷く）

甲斐 丸尾さん、内地におられました……？

丸尾 内地……？（首を振る）

甲斐 やっぱり人違いだ……私は生まれも育ちも日本でして……お宅とは出会ってもないんです……むろん友だちであろうはずがない……赤の他人……

甲斐、丸尾に背を向け、立ち去ろうとする。

丸尾 本当に忘れたのか……おまえ、よくいったろう、とこか遠くへ行きたいって……

丸尾 貧（まじゆ）しかつたから、白丁たつたから……それにオモニを憎んでたから……

丸尾 あれは十歳のときだよ……夜中、おまえは家出（て）ていった……たけとオモニ

丸尾 見ちゆかつた……とこ行くか……内地……駄目、駄目……喧嘩になった……しま

丸尾 いにおまえは石で……こんな大きな石でオモニの頭を……（殴るふりをする）

甲斐 ……

丸尾 光熙、オモニ死んでいない……生きているよ……この街にいる……

張本 （声）もしかして日野さんの……？

丸尾 ひのさん……？

張本 （声）あれ、何だっけ……韓さんだ、韓貞順さん……

丸尾 光熙のオモニてす……

張本 （声）国語を勉強なさってるんだよ、息子さんに手紙を書きたい一心で……

甲斐 そんな話聞かされても……私にどうしろって……お目にかかれたいんでしょ

丸尾 かね、息子になりすまして……母さん、長い間、心配かけてすみません、ずっと

甲斐 会いたかった……とか何とか涙ながらに……

丸尾 じゃ、何て俺にお金を……

張本 （声）お金……？

丸尾 光熙、お金くれます、内緒するため……でももういらぬ……嘘は嫌だ……

甲斐 出鱈目ばかりぬかしやがって……これだからヨボは……

丸尾 おまえたちが国語教えてくれたから……たからいろいろ話せる……

甲斐、窓から身を乗り出して校庭を見渡す。続いて廊下へ。

甲斐 金村さん……いらつしやいませんか、金村さん……

金村 （声）はい……

甲斐 （教室を指し）おりましたよ……

金村 （声）本当てすか……

甲斐 （教室に戻り）行き先は……

張本 （声）西大門（ソデムシ）の監獄だろう……

甲斐 入ってく奴はよく見かけるんですが、出てくる奴はとんと……

拳銃を構えて駆けこんでくる金村。

甲斐 （丸尾を顎で指し）張本です……

丸尾 ……

金村 （丸尾に銃口を向けるも）こ、こいちゆが……？

甲斐 手荒な真似はなさらぬよう……仮にも聖職者ですし……

金村 失礼（しちゆれい）いたしました……（拳銃を懐に収める）

金村、間合いを計りながら、丸尾に詰め寄っていく。

金村 張本……先生てすよね……

丸尾 ええ……

金村 金村誠の父親てす……倅が大変お世話になりました、無事（ぶじ）卒業することが

丸尾 ……

金村 おめでとごじやいます……（頭を下げる）

丸尾 （頭を下げて）ありがとごじやいます……

金村 ……（話の継ぎ穂が見つからない）

金村 先生の話は誠から……いっしょに南山で栗を拾ったり、清溪川で水（みじゆ）浴びしたり……張本先生のことばかり……

丸尾 ……
 金村 その先生がお上に刃向かうなんて……治安維持法違反容疑で逮捕させていたたき
 ます……（丸尾の手首を捕縄で縛ろうとする）

不意をついて金村を突き倒す丸尾。窓から飛び出し、雪の中を一散に駆けていく。

金村 （窓辺に駆け寄って身を乗り出し）いたぞ……そつちた、そつち……逃がすな……

（さりげなく教壇に立つ）……

甲斐 （窓を閉め）心配ご無用……袋の鼠です……

金村 これで心置きなく卒業式に……

甲斐 （椅子に腰かけて）そのまえにひとちゆ質問（しちゅもん）しても……

質問……？

甲斐 先生みたいですし……私も子ともに戻ったような……（挙手して）はい……

金村 （戯れに教師然と）金村くん……

甲斐 （起立して）パクガンヒつて誰（たれ）てすか……（黒板を指す）

金村 （黒板をちらりと見て）さあ、誰でしょう……

甲斐 いらっしやいましたたつけねえ、先生の中に……

甲斐 朝鮮名までは……

金村 ふむ……

甲斐 ……いや、何たか聞き覚（おぼ）えがありました……

金村 （窓外を指し）まだ追いかけてっこをしますけど……

甲斐 （窓外に目を向け）たらしがない連中た……（窓辺に歩み寄り）あれ、たしか張本

先生、足が悪かったんじや……

甲斐 そんなことはいいから……

金村 ええ、尻を引つ叩いてやりますよ……

金村、駆け去っていく。

甲斐 （廊下を覗いて）今のうちに講堂へ……

張本 ……

甲斐 見届けてやってください、卒業式……哲くんの晴れ姿もね……丸尾さんの分まで

張本 ……

張本 （教卓から顔を出す）……

甲斐 これでよろしければ……（上着を脱いで差し出す）

張本 あんたは……？

甲斐 さすがに素っ裸ではいられないんで、代わりに張本さんの……

張本 卒業式だよ……

甲斐 しっ……

張本 ……

甲斐 人の心配してる場合じゃ……あなたにとつても最後の卒業式になるんですよ……

張本 ……

張本 着替えましょう……

張本 ああ……

寒さに震えながら、上着のみならず、ズボンやシャツまでとり替えるふたり。

張本 俺は自分、娑婆には出てこれられない……だから正直に打ち明けてくれ……

甲斐 何度もいわせないでください……

張本 認めるわけねえよな……

甲斐 意外とお人好しですねえ……

張本 思い当たる節はある……

甲斐 ……

張本 あんたの話を聞いてると……何というか……憎しみを感じるんだよ、朝鮮語に対する……日本人なら毛嫌いはしても、憎んだりまではしないのに……

甲斐 仕事です、憎むことも含めて……

甲斐と張本、あらかた着替えおわる。

甲斐 (笑みを漏らし) 実をいうと、学校へ通ったことがついぞなかったんです、十四

になるまで……鉛筆握ったことさえ……貧しかったもんだから……いや、本当に

……バタ屋で身を立っててたんですよ……屑を拾ってね……ええ、たまにラジオも

……しばらくは手放しませんでしたけど……繰り返し分解したり、組み立てたり

して……それが飽きたら、売るんです、銅線やらニウムを……そうやって稼いだ

金で学校に……一生懸命、勉強しましたよ、文字通り、「いろは」から……だか

らでしようかね……昔の自分を見るような……

張本 哲か……

甲斐 顔は似ても似つかなかったけど……

張本 進級することになってんだ……おかげでまた痩せちまったよ、親父さん……

甲斐 ご安心ください……拘留が長引くようなら、私が面倒を見ます……

張本 当たたりめえだろ、お宅が濡れ衣着せたんだから……

甲斐 張本さんも同罪です……

張本 わかっている……もう教壇に立てやしない……

教室をあとにする張本。

甲斐 ……(椅子に腰かけ、黒板を見つめる)

いつの間にかやら、窓外に伊東がたたずんでいる。身じろぎもしない。チョゴリとチマが

雪に白く染められている。

甲斐 (気配に振り返って) 君ちゃん…… (窓辺に歩み寄り) どうしたんだい……
 …… (泣き出す)
 伊東 君ちゃん……
 伊東 甲斐さん探しました、朝からじゅくつと……
 甲斐 そう……寒かったろう……温まってきたな……

甲斐、伊東の頭や肩を覆った雪を払うと、達磨ストーブのところへ。

伊東 お嬢さま、内地から帰ってきたてす……
 甲斐 ああ……
 伊東 ても毎日、泣いています、甲斐さん、会いに来ないから……
 甲斐 …… (出ていこうとする)
 伊東 逃げないでください……
 甲斐 (足を止め) 練炭とってくるだけだよ……ほら、中に……風邪ひいちまうぞ……
 伊東 甲斐さん……
 甲斐 忙しかったのさ……今日だって卒業式が……
 伊東 お嬢さまも卒業 (そちゅぎよ) しましたよ……
 甲斐 ……
 伊東 もう好きじゃありませんか……嫌いになったてすか……
 甲斐 関係ないだろう、君ちゃんには……
 ……
 伊東 (窓辺に戻り) お屋敷まで送ってやる……僕もお暇しよう……
 甲斐 今の甲斐さん、昔の甲斐さんと違います……変わってしまいました、この学校へ来て、あの女に会って…… (戸口に目を向ける)
 甲斐 (振り返る) ……

そこに柳が立ちつくしている。

柳 帰られるんですの……
 甲斐 いや、まあ……
 柳 その格好で……?
 甲斐 おかしいかなあ……
 伊東 ヨボみたい……
 甲斐 ヨボ……?
 伊東 おい、ヨボ……こら、ヨボ……
 甲斐 よせつたら……
 伊東 私、いいてす、甲斐さんが朝鮮人ても、日本人じゃないても……
 甲斐 はあ?……何をいってんだ……

伊東 お嬢さまと結婚しない……それでもいい……

甲斐 ふざけるな……

伊東 ……

甲斐 いや、戯言だよ、戯言……僕を困らせたんだろう……

柳 ……

甲斐 二度と出鱈目な話はしないこと……ねっ……さあ、もうお帰り……

伊東 甲斐さんはヨボ……

甲斐 君ちゃん……

伊東 甲斐さんはヨボ、甲斐さんはヨボ、甲斐さんはヨボ……

甲斐 帰れ……とつとと帰りやがれ……

伊東 アイゴ―……私たつて……私たつてヨボなのに……

伊東、泣きじゃくりながら、雪の中を走り去っていく。

甲斐 まだまだ子どもだなあ……（窓を閉める）

柳 ……（室内に入ってくる）

甲斐 まさか君、本気にしたんじゃ……（鼻で笑って）馬鹿馬鹿しい……

柳 でしたらそれは……？（黒板を見やる）

甲斐 えっ……

柳 パクガンヒ……朝鮮人の名前かと……

甲斐 丸尾さんのお友だちだつてさ……

甲斐、板書を消そうと教壇に登る。

柳 張本先生、捕まったそうです……

甲斐 そりゃよかつた……（あたりを見回し）ねえ、黒板消しは……？

柳 教卓に……

甲斐 （教卓を覗いて）ないよ……

柳 あとで私が……

甲斐 子どもが戻ってくるだろう……

柳 それで……そうそう、警察の方に妙なことを尋ねられました……

甲斐 どこにあるんだ……

柳 だから……

甲斐 黒板消し、黒板消し、黒板消し……

柳 はぐらかさないでください……

甲斐 聞いているよ……何を尋ねられたつて……

柳 張本先生は国語が上手ではないんですかと……たぶん丸尾さんと間違えられた
んでしよう……（教卓に目を据えて）そこにいらつしやるのね……

甲斐 だとしたら……？

柳 いうまでもないですわ……

甲斐 売るのかよ……

柳 ……

甲斐 同胞を売るのか……

柳 あなたにとやかくいわれたくありません……

甲斐 ……

（教卓のまえに進み出）張本先生、柳です……教育実習からはじまって今日に至るまで、先生には多大なるご指導ご鞭撻をたまわり、感謝のことばもございました……不肖ながら、私も張本先生の教え子です……ありがとうございました……

柳、深々と頭を下げ、去ろうとする。

甲斐 行くな……（柳のまえに立ちはだかる）

柳 ……

甲斐 ここにいてくれ……

柳 甲斐さん、わかっていないんじゃないかしら、自分が何をいつているのか……

甲斐 わかっていない……？

柳 総督府のお役人さんでしょ……朝鮮人に情けをかけてどうするんです……

甲斐 君だって似たようなもんさ……

柳 私……？

甲斐 日本人のお妾さんになろうとはねえ……

柳 当局も奨励しているじゃありませんの、内鮮の結婚を……

甲斐 それとこれとは……だいたい妾だろ……

柳 いずれ日本人でいい方がおられましたら……

甲斐 なぜだ……なぜ朝鮮人じゃない……なぜ日本人なんだ……

柳 （ころころと笑って）さつきからとんちんかんなことばかり……やっぱりどうかしていますわ、甲斐さん……

甲斐 教えてくれ……

柳 血をね……血を消してしまいたいから、朝鮮人の血を……そのためには日本人と交わりませんと……血を混ぜてゆかねばならないんです、何代にも何十代にも亘つて……

甲斐 俺も日本人だぜ……

柳 ……

甲斐 君を日本人にしてやろう……

柳 嘘……

甲斐 ……日本人じゃない……朝鮮人よ……

柳 違う、違う……

甲斐 もしやあなたの仕業じゃありません、落書きも……？

柳 えっ、俺が……？

甲斐 京城に赴任なさった年からですもの、落書きされるようになったのは……学校へ

甲斐

いらつしやるたびに落書きが見つかりましたし……よくよく思い返してみますと……どなたの影を追っていらしたのかしら……

柳

冗談ですわ……できっこないでしょ、甲斐さんには……からかってみただけ……いつかのお返し……

虚ろに立ちつくす甲斐を残して教室をあとにする柳。

甲斐

……

黒板に目を向ける甲斐。上着を脱ぎ、それで板書を消そうとする。気が触れたかのよう。

丸尾

消すな……

軒下に丸尾。窓にへばりつくように立っている。顔は血にまみれ、服はぼろぼろだ。

雪はいつかなやみそうにない。

遠くかすかに『仰げば尊し』の合唱。

甲斐

……

4

一九四四（昭和十九）年五月上旬のある日。午後四時ごろ。

一年四組の教室。

一見、室内の様子に変わりはないが、「日ノマル」と認められた習字の書には、以前のようになんか半紙ではなく、古新聞が用いられている。紙が統制されているためだろう。

国語講習会が行われている模様。

机を挟んで向かい合う柳と日野。片や地味な筒袖にもんぺ、片や粗末なチヨゴリにチマ。

日野は便箋に手紙を綴っており、柳はその手ほどきをしている。

晩春のさわやかな風を吹き抜ける。

日野

（手紙を読みあげる）いちゅもあなたのことばかり考えています……

柳

あなたのことばかり考えています……

日野

あなたのことばかり考えています……

柳

ばかり……

日野

ばかり……

柳

「ば」……

日野

「ば」……

柳 「ば」です、「ば」……

日野 「ば」です、「ば」……

柳 「は」に点々だから「ば」……

日野 「は」に点々だから「ば」……

柳 「ば」っていつてるでしょ、「ば」って……

日野 「ば」……？

柳 そう、「ば」……

日野 「ば」……

柳 ばかり……

日野 ばかり……

柳 あなたのことばかり考えています……

日野 あなたのことがばかり考えています……

柳 ……

日野 とつちてもいいですよ、私、読みませんから……読むは息子です……

柳 じゃ、続き……

日野 うん……何書きましょうか……

柳 正直なお気もちを……

日野 例えば……？

柳 息子さんに会いたいか……

日野 あいたい……？

柳 会いたい……「たい」は願望を表します……（身ぶりを交え）お腹がすきました、

日野 ご飯が食べたい……もうたくさんです、横になって眠りたい……

柳 息子いません、息子会いたい……

日野 会いたいですよ……

柳 そういったことをお書きになれば……

日野 会いたい……（便箋に認める）

柳 少しはご自分で考えませんか……私の手紙じゃないんだから……

教室のまえを通りがかった千代田、人影を認めて入ってくる。国民服姿。

千代田 相変わらず精が出ますね……

日野 千代田（ちよた）先生……（席を立て千代田のもとへ）

柳 あらあ……（立ち上がる）

千代田 お久しぶりです……

日野 嬉しい……先生帰ってきた……

千代田 先生はよしてください、もう教師じゃありませんし……

日野 先生、また国語教えてほしいです……

柳 （便箋を翳して）日野さん……

千代田 どうやらお邪魔だったようで……

日野 大丈夫……ひと休み……

柳 いけません……

日野 いけません、いけません……柳先生、厳（きび）しい……時々（ときとき）、叩き
ます……

千代田 叩く……？

日野 仮名も読めないの、馬鹿（ばか）……（叩くふりをする）

柳 （日野に詰め寄って）変なことおっしゃらないで……

日野 本当、本当……

千代田 お婆さんのためですって……国語を覚えていたどころと……

柳 真に受けないでください……私がそんな乱暴な真似……

千代田 ええ、もちろん……

柳 さあ、やりましょ、日野さん……

千代田 （便箋を覗いて）ひよつとして息子さんへの……

日野 見ちゃ駄目……（便箋をうしろ手に隠す）

千代田 驚いたなあ……てつきりもう……

柳 （席に戻り）かれこれ三年になるんですけど……「あいうえお」からはじめて、
やつとここまで……いい加減、けりをつけませんと……

日野、席について鉛筆を手にする。しかしあまり気乗りしないようだ。

千代田 ところで教頭先生はどちらに……帰られたんですかねえ……

柳 いや……

千代田 教員室にはおられませんでしたよ、ほかの先生方も……

柳 ちよつと出払っておりました……ほら、ぼんやりしない……

日野 考えています……

千代田 子どもたちといっしょに……？

柳 はい……？

千代田 （校庭を見渡して）人っ子ひとり見当たりませんが……何かありましたっけ……

柳 ……

千代田 わかった……出征兵士のお見送りでしょう……みんなで京城駅へ……

日野 同盟休校（とうめきゅこ）です……

千代田 とうめきゅこ……？

日野 （首を振って）同盟休校……

柳 お喋りはあと回し……

日野 同盟休校ですよ……同盟休校、同盟休校……

柳 （根負けして）同盟休校……

千代田 同盟休校って……あの同盟休校ですか……

柳 （居直って）ええ、そうですよ、ストライキ……

廊下に出て左右に連なる教室を見渡す千代田。

ひっそりと静まり返っている。人の気配どころか、物音ひとつしない。

柳 全校児童、挙って欠席しまして、初等科も高等科も……今朝から教員総出で家庭訪問に……明日は必ず学校へ来るよう……

根岸が廊下を足早にやってきたようだ。

根岸 (声) 千代田くんじゃないか……

千代田 ああ、先生、長らくご無沙汰いたしました……

根岸 (戸口に姿を見せ) 折角、来てもらってなんだが…… (室内に入るよう千代田を促し) 実をいうと、厄介なことが起きちまってな……積もる話もあるだろうけど……

千代田 承知しております……

根岸 筒抜けか…… (柳に一瞥をくれる)

千代田 この非常時にストライキだなんて……一体、何だってそんな羽目に……主義者が糸を引いておるんでしようかねえ……

根岸 (千代田のことを遮って) 柳くん、校長がお呼びだ……

柳 講習会の最中なんです……

日野 手紙書いています……

根岸 それどころじゃございませんので……さあ……

柳 お詫びでしたら、先ほど……

根岸 まだ理解しちやおらんようだな、自分(じぶん)の立場を……校長も庇(かば)いされんってよ……まあ、休職で済んだら、御の字……うちののんびりしてろ……

日野 柳先生も学校休むてすか……

千代田 どうして……

根岸 早く……

日野 駄目です……先生みんないないになります……

根岸 いるじゃありませんか、私が…… (柳の腕を掴み) ほら、校長がへそ曲げるぞ……
柳 (立ち上がって根岸の手を払い) 日野さん、今日中に書きあげましょう……

苛立ちもあらわに教室を出ていく柳。

根岸 ったく意地っ張りなんだから…… (椅子に腰かけ) いや、散々な目に遭ったよ……

門前払(ばら)いは当たりまえ……塩まで撒かれたんだぞ……朝鮮人なら朝鮮語を喋りやがれってね……

千代田 柳先生が何か……

根岸 (日野に目をやり) 教員室へ行こう……

日野 気にしないでください、難(むじゅか)しい話わかりませんから……

日野、手紙にとりかかる。

根岸 頭を叩いたんだよ、子どもの頭を……

千代田 叩いた……？

根岸 朝鮮語を口にしたお仕置きに……

千代田 当然でしょ、学校では国語が決まりなんですもん……

根岸 いかにも……それしきのことなら咎められるいわれはない……

千代田 ……

根岸 ところが頭を叩かれた拍子に気を失っちゃってね……幸い命に別状（べつじょう）
 なかったんだけど……面倒なことに親御さんらが騒ぎ出しちゃって……憶（おぼ）
 えてるだろ、書堂（ソダシ）の先生……創氏改名に最後まで抵抗した……あの親父
 さんが血相変えて怒鳴りこんできたのさ、学校は子どもを殺す気かって……

千代田 いいがかりだ……

根岸 まえまえから評判（ひょうばん）がよくなかったんだよ、柳くん、子どもにも大人
 にも……度が過ぎるというか……講習会にしてもそう……家はまだ押しかけるん
 だぜ……いっしょに国語を学びませんか……ときには庭先で授業をはじめた
 り、無理やり学校へ連れてきたり……国語を身につけないと、お子さんとお話し
 できなくなりですよ……とか何とか脅し文句さえ……

千代田 先生はあくまでよかれと……

根岸 よかれねえ……

千代田 内鮮一体、まず国語……ええ、それが学校の使命では……

根岸 現実を見たまえ……出席したのはたったの一名、丸尾だけだ……講習会も今や
 日野さんひとり……使命も何もあつたもんじゃない……

千代田 ……

根岸 なつかしいものを見せてやろう……

根岸、教卓の抽斗を開け、札が盛られた木箱をとり出しては並べる。

根岸 こんなにあつても、足りないんだとき……まつ、無理もないがね……片っ端から

ぷら下げるんだよ、少しでも訛っておったら……国語を使っても……

千代田 国語を使っても……？

根岸 君にも残ってるだろ……その……朝鮮語ならではの発音やら抑揚やら……むろん

儂にも……舌に刻まれた訛り……それすらも許せないらしい……

千代田 私は訛っちゃいませんよ……

根岸 （鼻で笑い）そう思ってるのは自分だけ……

千代田 本場仕込みですから……

根岸 ほくら……

千代田 えっ……

根岸 （口真似して）本場仕込みですから……

千代田 ……（木箱から札をとる）

根岸 いやいや、そんなつもりじゃ……

千代田 訛ってたんでしょ……（札を首にかける）

根岸 だったら儂も……（札を首にかけ）一枚では済まないけど……

根岸のことばをかき消すように轟音が響き渡る。上空を戦闘機が飛来しているようだ。

千代田 （窓辺に駆け寄り）B29です……この野郎、土足で踏み躪りやがって……

根岸 足もとを見よつたのかもしれない……

千代田 はい……？

根岸 同盟休校……柳くんひとりの責任じゃあるまい……朝鮮人が足もとを見るようになったんだよ、日本人の足もとを……恐るるに足らんどつて……実際、日本軍の旗色は悪いというじゃないか……

千代田 ……

根岸 そうだ……何か話があるんだっけ……

千代田 ええ、実はその……やっぱりよしましよ……後日、また……（去ろうとする）

根岸 いやいよか……

千代田、足を止め、直立不動の姿勢をとる。

千代田 このたび、私、千代田慎吾は第二十師団歩兵第七十九連隊に配属されまして出征

日野 先生……（立ち上がる）

千代田 （懐から一枚の紙片をとり出し）おそらくは南方へ行くことになるのかと……

根岸 召集令状か……

日野 見せて、見せて……（紙片を引っ張る）

千代田 ちよ、ちよつと……触らないでください……

根岸 もつたいつけるなよ……

千代田 （紙片を掲げて）私にとっては証文みたいなものですから……

日野 しょうもん……？

千代田 皇国臣民の証しを立てる……正真正銘、日本人だと……

日野 はあ……

千代田 ようやくここまで登りつめたんですよ、内鮮一体の梯子をね……一段一段、朝鮮語を捨て、朝鮮名を改め……

根岸 たいしたもんだよ……子どももあとに続くだろう……

千代田 信じてよろしいでしょうか……

根岸 えっ……

千代田 万が一にも梯子を外されるようなことはない……やりきれませんからね、日本人ならまだしも、同胞に見放されては……

根岸 いらぬ心配するな……

日野 先生、生きて帰ってきてください……

千代田 欣然として一身を捧げ、一死をもつて皇恩に報いるべし……覚悟の上です……

根岸 では、千代田慎吾くんの武運（ぶうん）長久を祈念いたしまして……万歳（ばんざい）

千代田 あのこと……
 根岸 何だい……
 千代田 万歳です、万歳（ばんざい）じゃなくて……
 根岸 万歳（ばんざい）……日野さんも……
 日野 万歳（ばんざい）……
 千代田 だから万歳ですよ、万歳（ばんざい）でも万歳（ばんざい）でもなくて……
 根岸 万歳（ばんざい）……
 日野 万歳（ばんざい）……
 根岸 万歳……
 日野 万歳……
 根岸 万歳……
 日野 万歳……
 根岸 万歳……
 日野 万歳……
 千代田 行ってまいります……（深々と首を垂れる）

万歳三唱の最中、戸口に姿を現す木之下。チョゴリとバジにツルマギを羽織り、韓服に身を装っている。手には例の旅行鞆。いつになく思いつめた顔つきだ。

日野 あら、あなた……
 根岸 お知り合いですか……
 千代田 たしか木之下とかつて……
 根岸 木之下……？
 木之下 木之下です……
 根岸 誰かと思っただけ……
 木之下 でしょうね……僕も誰かと思いましたが、鏡を見て……
 千代田 一体、どういう風の吹き回しだ、チョゴリなんぞ着やがって……洋服のほうがお似合いだぞ……
 根岸 まあ、たまには悪くないさ……ほら、そんなところに突っ立ってないで……
 木之下 では、失礼して……（室内を見回して）張本先生は……？
 千代田 知らんのか……（笑みを浮かべ）檻の中……
 木之下 あれ、もう放免されたんじや……
 千代田 まさか……
 木之下 手紙に書いてありましたよ、春にはお天道さまが拝めそうだって……
 根岸 まだ当分（とうぶん）、出てこられんだろう……
 千代田 出てこられたとしても、どの面下げて……学校の看板に泥を塗ったんですよ……
 木之下 合わせる顔などないでしょう……
 根岸 そうですよねえ……
 千代田 （旅行鞆に目をとめ）また内地へ行くのかい……
 木之下 うらやましいご身分だな……
 今度は違います……汽車も船も三等ですので、同胞とおなじように……だから

こんな格好までして……乗っけてくれないかもしれません……

木之下、旅行鞆を床に置き、懐からとり出した一枚の紙片を根岸に手渡す。

日 野 召集令状（しょうしゅれいじょ）ですか……

千代田 召集……？

木之下 ではなくて……

根 岸 （紙片に目を通して）徴兵……？

千代田 徴兵……？

木之下 でもなくて……検査ですよ、徴兵検査……

日 野 ちようへけんさ……？

木之下 徴兵に当たって検査を受けると……

千代田 じゃ、どうして内地へ……

木之下 万一、合格しちゃったら、否が応でも戦争に行かねばなりませんので、しばらく

東京で身をひそめていようかと……

根 岸 そうか……わかった、わかった……それならとつと……（旅行鞆をもたせる）

木之下 えっ……

根 岸 張本くんには伝えておいてやるから……さあさあ……

木之下 では、みなさん、お達者で……（当惑しながらも、出ていこうとする）

日野、再び手紙にとりかかる。

千代田 逃げるのか……

木之下 ……（立ち止まる）

根 岸 まあまあ、いつものことじゃないか……

千代田 国家の命令ですよ……

根 岸 どうせ落つことされるさ……むしろそのほうがお国のためになるだろう……

千代田 たとえ必要とされなくとも、我々は戦わなければならないんです……

木之下 お断りいたします……

千代田 恐れ多くも大君の御楯として兵に召されるんだぞ……

木之下 要するに弾よけでしょう……

千代田 名誉なことだ……（旅行鞆を引っ張る）

木之下 日本人に褒められたって……

千代田 そういわずに……なあ、考え直してくれ……ともに戦い、ともに散ろう……

木之下 とともに……？

根 岸 千代田くんも出征するんだよ……

千代田 教師たる者、範を垂れませんか……ほら、私についてこい……

木之下 誰があなたに……（旅行鞆を奪い返す）

千代田 なぜ……

木之下 死にたくないからです……

千代田 死にたくないだと……笑止な……一朝お国にことあるときは命を捨つるが皇国

臣民の道であらう……そうだとも……朝鮮人は死なねばならんのだよ……それが
たったひとつのご奉公なのさ……まこと美しい人生だと思わんか、お国のために
死ぬるなんて……

木之下 日本に勝ち目などありやしません……必ず負けます……犬死にだ……

千代田 よくもぬけぬけと……この非国民めが……

木之下 怖いんですよ……死ぬのが怖いんじゃない……何者でもないまま死ぬのが怖い
んです……生きた証しを残すまでは死ぬに死ねません……

千代田 だからだ……だから朝鮮人が侮辱されるんだ、きさまのような奴がのさばって
もんだから、臆病で怠惰で、そのくせ尊大きわまりない奴が……おかげで俺たち
まで卑屈にさせられてきたんだぞ……時々、誰彼構わず頭を下げたくなるのさ、
朝鮮人ですみませんって……わかるか、この気もち……きさまにわかるか……
(木之下に詰め寄る)

根岸 よしな……

千代田 おい、返事をしろ、おい……

木之下 おいではありませんよ、僕は……

千代田 木之下……

木之下 でもありません……李です、李同和……

千代田 (呵呵大笑して) そんな名前あるわけないだろ、李だの金だの朴だの……

木之下 もうやめましょう、下手なお芝居は……ねっ、趙先生……

千代田 馬鹿にしよって……

千代田、木之下に組みつくと、力任せに殴る蹴る。

木之下、机を飛び越え、椅子を薙ぎ倒しながら、逃げ惑う。

根岸 (間に割って入り) こら、いい加減にしろ……あつ、痛たたたつ……

柳が戻ってくるも、もはやお手上げ、戸口に立ちすくむよりない。

柳 ……

黙々と手紙を綴っていた日野、やおら席を立てて教壇に登り、一喝する。

日野 うるしやい……授業中ですよ……

虚をつかれたのだろう。手足を止め、ことばを失くす男たち。荒い息遣いが教室に響く。

日野、席に戻って便箋に向かう。

柳 一体、何が……

根岸 餓鬼の喧嘩だよ……ともかく校長に報告してきたまえ……

千代田 はい……

木之下 じゃ、僕も……（旅行鞆を掴む）

千代田 当局に通報してやる……

木之下 ……

千代田 それまでに京城から出ていけ……（立ち去ろうとする）

根岸 （体を震わせて）冷えてきやがった……

根岸、窓を開める。

柳 あの……

根岸 ん……？

柳 校長先生から伺ったんですが……

根岸 甲斐さんのことだろ……僕もついさっき……

千代田 （足を止めて）何でも役所をおやめになったそうで……

柳 ご存じでしたか……

千代田 こちらへ来るまえに立ち寄ったんです、総督府に……甲斐さんにも一言、ご挨拶しよう……生憎、お会いできませんでしたけど……先月、辞表を出されたんだとか……

柳 どうして……

千代田 理由までは……

根岸 去年、ご結婚なさったんだ……お相手は学務局長のひとり娘……婿入りだったさ……今はだから大槻さんか……まっ、時間の問題だがねえ、甲斐さんに戻るのも……

千代田 とおっしゃいますと……

根岸 一年もしないうちに出ていっちゃまったのよ、身重の奥さまを残して……おまけに役所も休みがちになってな……たまに顔を出しても、上の空……しまいには仕事ほったらかして街をほつき歩いてたんだと……

木之下 二三遍、鐘路で見かけましたよ……（旅行鞆を足もとに置く）

根岸 鐘路……？

木之下 飲んでたんです……声はかけませんでしたけどね、何となく近寄りづらくて……あちこちで噂を聞いてましたし……店の中で大暴れしたとか、女給にちよっかい出したとか……悪い噂ばかり……

千代田 あの甲斐さんが……

根岸 血迷ったとしか考えられん……役所にも愛想を尽かされたんだろう……お払い箱（ばこ）も同然らしい……

柳 だからどうしてなんです……

根岸 儂に聞かれても……

柳 辞表には……？

根岸 （いくぶんいい淀むように）落書きは自分の仕業だつて……

柳 ええ……？

千代田 甲斐さんが犯人……？

根岸 その責めを負って職を辞すると……

千代田 いや、でも……日本人ではありませんか……

根岸 まあ、いいじゃないか、本人がやったといっておるんだから……儂らに対する

疑いも晴れるんだし……

柳 そんなはず……あの方は無実ですよ……

根岸 犯人であろうがあるまいが、もはや赤の他人……肩をもつことはない……

先刻から金村が戸口にたたずんでいる。詰襟の白い制服姿。

金村 甲斐壮一郎ですか……

根岸 ああ、金村さん、これはこれは……

金村 お邪魔して申しわけございませぬ……奴さんに用がありまして……

根岸 甲斐さんでしたら……

金村 当てが外（はじゆ）れたみたいですね……（室内に入ってくる）

柳 落書きの件でしょうか……

金村 落書き……？

千代田 ハングルで黒板や壁に……お聞きになってません……？

金村 たたの悪戯（いたじゆら）ては？……警察（けいさちゆ）の出（て）る幕じやありませんよ……（教壇に登り）ほお、こりやいい眺めた……

柳 じゃ……

金村 どうぞおかけになって……

根岸 お構いなく……

柳 教えてください……どうかなさったんです、甲斐さん……

金村 少々、古い話がありますが、三年ほどまえ、内地で珍妙な事件が起きまして……

まあ、よくある押しこみ強盗ですけとね……ところがその盗っ人、頑として口を

割ろうとしなかったんです、名前だけは……

木之下 ああ、名なしの権兵衛か……一時、話題になってましたよ……

金村 それがよくやく白状しまして……何てことはない……ぱつが悪くていえなかった

んです……てめえの名前を売っちまったもんだから、戸籍と併せて朝鮮人に……

朴光熙とかいう……

柳 朴光熙……

金村 そんなこんなであちらの警察から身元の照会を求められましてねえ……京城中を

探して回ったんです……創氏改名の帳簿（ちようぼ）を調べたり……しかしまるで

埒が明かなくて……ために日本名の線を当たってみたんです……

千代田 してその名前は……？

金村 もうお気ちゆきてしょう……

柳 甲斐壮一郎……

ことばの継ぎ穂を失い、押し黙る一同。

日が暮れてきた。薄絹を重ねていくように暗く翳っていく。

根岸 　　つてことは甲斐さん……

千代田 　　そうなりますね……

金村 　　現在（げんじゃい）、裏ぢゆけをとつてる最中ですが、まあ、間違いないかと……
まんまとなりすましておつたんです……

柳 　　戸籍を買っただけじゃありませんの……何がいけないんです……

金村 　　考えてもみてくたさいな……総督府に潜りこんでたんですよ……むろん朝鮮人は
幾人もおりますけどね、素性のたしかな朝鮮人が……でも奴さんは正体を隠し、
名前を騙つてた……反日分子（ぶんし）と見るのが道理（とうり）でしょう……

根岸 　　役所を追い出されたんだとか……

金村 　　官舎ももぬけの殻でした……未たに行方知れじゆてす……目下、署を挙げて捜索

しておりますが、すてに街を離れ、高飛びしたんじやなろうかと……内地か、
あるいはロシアか支那へ……

柳 　　でしたらわざわざいらつしやらなくても……無駄足じゃございませんか……

根岸 　　こら、無礼だろう……

金村 　　いえ、おっしゃる通りでして……

木之下 　　では、何か別の用向きが……

柳 　　疑つておられるんですよ、私たちを……

金村 　　いやいやいや……

木之下 　　凶星だ……

根岸 　　やましいことなどしとらんぞ……

柳 　　甲斐さんの居所を知ってるんじやないか……

根岸 　　君は？……君なら知つてもおかしくはあるまい……

千代田 　　知つてるんですか……

柳 　　（首を振り）知りませんよ……

金村 　　いやいや、先生を疑うなんて滅相もない……みなさんのお話を聞かせていたたき
たくて……それゆえこちらに……

根岸 　　我々の話を……？

金村 　　ひとまじゆおかけになつてくたさい……

一同、訝しそうに椅子に腰かける。

我聞せずと手紙を書き続ける日野。

金村 　　どうぞ楽に……授業じゃありませんから……

根岸 　　さあ、何なりと……

金村 　　ああ、ええ……その……いささか疑問に思ひましてね、本当にご存じなかったの
か……ちゆまり……甲斐壮一郎の正体を……

根岸 　　朝鮮人だと……？

千代田 　　わかつていたんじやないかって……？

金村 わかっていたといわないまでも、薄々、感ぢゆいていた……

千代田 感づいていたのに、隠していた……？

金村 隠していたというより認められなかった……

柳 認められなかった……？

金村 もしや同胞（とうほう）ては……ふとそう感じながらも、すぐさま否定するんてす、まさか同胞であるはじゆがないって……とういうわけか認められない……いや、私はね……私は認めることができなかったんてす、はじめてあの男に出会（てあ）ったときからじゆつと……もしやとまさかの繰り返して……私てさえそうてしたから、おそろくみなさんも……

木之下 （立ち上がり）実をいうと、僕も何とはなしに……

金村 同胞ではないかと……？

木之下 臭いといえますか……あるでしょ、朝鮮人に特有の……上手くいえないんだけど……かすかにそんな臭いがしたもんですから……

根岸と千代田、お互い顔を見合わせる。

金村 思った通りた……

柳 （咳くように）今更、何よ……

根岸 えっ……

木之下 あんまりだわ……だってそうじゃありませんの……あの方は日本人の仮面を被り続けていたんですのよ、朝鮮人の素顔をひた隠しに隠して……とうに見抜かれていたにもかかわらず……ひとり何も知らぬまま、習い性のよう……何年もの間……ひよつとすると子どものころから……気づいていらしたんなら、それとなく教えてさしあげればよかつたのに……

木之下 そりやまあ、ごもつともですが、いざ本人をまえにすると、なかなか……自分に返ってきちやいますんで……あなたは本当に日本人ですか、実は朝鮮人じゃありませんか……ってなことをいおうもんなら、そっくりそのまま自分にも……僕は本当に日本人なのか、実は朝鮮人じゃないのか……

金村 鏡みたいなものでしょうかねえ、奴さんは……ええ、私たちが見たくないものを写（うちめ）す鏡……

軒下に伊東。息を弾ませている。駆けてきたのだろう。真っ白なチヨゴリが汗で滲む。

今にも泣き出しそうな顔つきだ。窓を叩きながら、声を嗶らして叫ぶ。

伊東 甲斐さん……甲斐さん……

慌てて窓を開ける柳。

伊東 （室内を覗きこみ）甲斐さんは……？

柳 甲斐さんがどうしたの……

伊東 いるてすか……いないてすか……

柳 （首を振り）ここには……

伊東 じゃ、とこ……あなたのおうちてしよ……

柳 馬鹿なこといわないでちょうだい……

伊東 返して……甲斐さん返してよ……

柳 だから何があつたの……聞かせて……お願い……

伊東 嫌……

伊東、踵を返して駆け去ろうとする。

柳 待ちなさい……（窓から身を乗り出し、伊東の袖を掴む）

伊東 離して……痛い……

柳 破れたって知らないわよ……

木之下 落ちつきなつて……ほら、先生も……

窓辺に近寄り、ふたりの女を囲む男たち。

伊東、掴まれた袖を振りほどき、居直つたように柳を睨めつける。

伊東 時間ありません……早く甲斐さん助けないと……

根岸 農らも探してるんだ……

千代田 必ず見つけてあげるから……ねっ、教えてよ……どうしたんだい……

伊東 ピストルなくなりました……

金村 ピストル……？

伊東 今朝、ご主人さま気づゆいたてす……

柳 甲斐さんがもつていったのね……

伊東 たぶん一昨日の夜中……私、鍵開けましたから、甲斐さんに頼まれて……

金村 くそっ、京城にいたのか……至急、指名手配いたします……みなさんも心当たり
がございましたら……

教室を飛び出していく金村。

伊東 あなた、なじえ甲斐さん探します……

柳 なぜって……

伊東 甲斐さん好きですか……

柳 甲斐さんはね、甲斐さんじゃないの、本当は……

伊東 名前なんてどうでもいい……

柳 ……

伊東 私、甲斐さんに会いたい……会いたいから、探す……甲斐さん見つけるは私です
……

伊東、チマの裾を翻して駆け去っていく。
窓辺に立ってそのうしろ姿を見つめる柳。

木之下 僕も探しに……

千代田 汽車に乗り遅れちまうぞ……

木之下 明日もありますから……

千代田 明日か……つくづく君がうらやましいよ……

木之下 先生は怖くないんですか……明日がないかもしれないですよ……

千代田 そんなことよりも、これまでやってきたことやこれからやろうとしていることは

何の意味もないんじゃないか……そう考えると、怖くて気が狂いそうになる……

木之下 きつと子どもたちが憶えていてくれます……

教室を出ていく木之下。

根岸 すまん、ゆつくり話もできないで……一杯やりたかったんだけど……

千代田 またいづれ……

柳 いつでもいらつしやってください……

千代田 ええ、では……

教室を出ていく千代田。

柳 私はないかもしれませんが……

根岸 休職か……

柳 とりあえず向こう四ヶ月……

根岸 そのうちほとぼりも冷めるだろう……しばらくの辛抱だ……

柳 折角のお休みですので、一から国語を勉強し直そうかと……

根岸 ったく懲りん奴だな……

教室を出ていく根岸。

柳 ごいっしょにいかがです、日野さんも……

日野 ……（手を休め、顔を上げる）

柳 甲斐さんを探しに……

日野 ……

柳 甲斐壮一郎さん……いえ、甲斐さんじゃなくて……

日野 光熙でしょ……

柳 ええ、息子さんです……

日野 ここで待ちます……手紙を……

柳 わかりました……

日野 つけてください……（電灯を指す）

柳 ああ、はい……

柳、電灯を灯すと、静かに教室をあとにする。

脇目も振らず手紙を認める日野。

夜風がかすかに窓を鳴らし、ほのかな灯りを揺らす。

日野 ……

戸口に甲斐。背広を纏っているものの、うらぶれ、やさぐれた風貌は隠せない。日野のもとへ背後から歩み寄る。

甲斐 ……

日野、足音に振り返ろうとする。

甲斐 見るんじやねえ……（机をいくつか挟んで日野を見据える）

（視線を戻して） 光熙ですか……

いいや……

日野 その声……光熙たる……なあ、光熙……

日野、嗚咽を漏らす。それはたちまち慟哭となる。

日野 アイゴー、アイゴー……

違う……

……

俺は甲斐壮一郎……日本人だよ……息子さんとは古いつき合いでね……

……

探したよ……

私を……？

彼に頭を下げて頼まれたもんだから……この半年というもの、昼となく夜となく……仕事もそっちのけで……街中、駆けずり回ってさ……もちろん学校にも……並木町の女郎屋まで……中にはいるからな、色気違いの婆さん……

私たって探しました……

……

日野 じゅつと……息子がうち出（て）てからじゅつと……村の人はみんないきました
甲斐 けと……光熙は十歳（じゅきい）、ひとりて生きていけない、悪いことはいわん、
日野 諦める、オモニ……いいや、光熙は強（ちゆい）い子、絶対（じえたい）生きている
甲斐 ……私、疑いませんでしたよ……じゅつと探したてす……京城たけじゃない……
日野 釜山も行きました、光州も大邱も平壤も……私の息子知りませんか……名前は朴
光熙……今、十二歳てす……十七歳てす……二十四歳てす……三十三歳てす……

甲斐 オモニも年をとりました……（再び振り返ろうとする）
 日野 見るなといったろう……
 甲斐 会いたい……光熙に会いたいです……
 日野 ……
 甲斐 会わせてください、光熙に……
 日野 よし……

甲斐、ポケットから拳銃をとり出し、日野の後頭部に銃口を向ける。

甲斐 立て……
 日野 また駄目……（鉛筆をとる）
 甲斐 宿題ならうちでやってくれ……
 日野 手紙です……あとちよっと……
 甲斐 ……
 日野 （文字を認めつつ）敬具……昭和……
 甲斐 十九年……
 日野 十九年五月（ごがちゆ）七日……日野さだ……朴光熙さま……
 甲斐 ……
 日野 てきた……（両手で便箋を掴み）読みましょうか……
 甲斐 いや、結構……渡しといてやる……
 日野 聞いてちょうたい……間違いないか、国語の間違い……

日野、甲斐の返事を待たず、つかえつつつかえ手紙を読みあげる。

日野 拝啓……風（かじえ）薫るさわやかな季節（きせちゆ）となりました……久しく……
 甲斐 （便箋を掲げて指さす）
 日野 ご無沙汰（ぶさた）して申しわけございません……もっと早くお便りしたかたの
 甲斐 ですが、国語を勉強しているうちに時間だけが過ぎてしまいました……今は五月
 日野 ……京城ではケナリが花を散らし、ムクゲが蕾（ちゆぼみ）を綻ばせています……
 甲斐 東京でも色とりとりの花が咲き誇っていることでしょう……しかしあなたはもう
 日野 そちらにいないのかもしれないね……光熙を見かけたとき、そう耳にしたのは
 甲斐 かれこれ十年もまえのことですから……光熙、あなたは今、どこにいますか……
 日野 お嫁さんはもらったのかしら、子ともは何人いるのかしら、幸せに暮らしている
 甲斐 のかしら……いちゆもあなたのことばかり考えています……会いたい……光熙に
 日野 会いたい……いちゆもあなたのことばかり思っています……死ぬまえに一目会
 甲斐 たい……会えるなら、死んでもいい……

日野 ……
 甲斐 光熙、母さんには昔、名前がありませんでした……韓さんちの子、そう呼ばれて
 日野 いたです……生まれてはじめて名前をいたたいは結婚（けこん）のとき……韓

貞順になりました……そして次（ちゆぎ）は日野さだ……名前は幾度（いくたび）か
変わりましたが、私はあなたのオモニです……それだけは一生（いしよ）う、変わ
りません……あなたが帰るところ、オモニがいるところ……早く帰ってきてくだ
さい……待っています……敬具……昭和十九年五月七日……日野さだ……朴光熙
さま……

……

間違いないですか……

聞くんじゃないかな……

はい……？

今更、母親面しやがってよ……そんな手紙もらっても、はらわたが煮えくり返る
だけだ……渡さないほうがいい……

なじえ……

ええ？……憶えてねえのか……捨てたんだろ……

……

彼が十歳のころだっけ……あなた、夜な夜な、家を空けてたそうじゃないか……
息子が寝つくとき、こっそり床を出て、小ぎれいに身繕いして……彼、気づいてた
んだってよ、衣擦れの音で……かさこそって……その音を聞きたびに不安に
駆られたらしいね……捨てられるんじゃないかと……しばらく帰ってこないこと
も珍しくなかったから……二日や三日……長いときは一週間もひとりぼっち……
堪んねえぞ、十やそこらの子どもには……腹が減つても、食うもんはないし……
夜は怖くて眠れないし……だったら泣いて引き止めりやいいものを……オモニ、
行かないでくれ、いっしょにいてくれて……だけど彼はいいわなかった……いえ
なかった……そんなこと口にしようもんなら、本当に捨てられちゃう気がしてね
……代わりに冬のある晩、オモニのあとをつけてみたんだ……夜毎、どこへ行く
のか……それだけでも知りたいと思つてさ……

……

月夜だったよ……あなたは川に入り、横切つていった……うっすら氷が張るほど
冷たいつのに、膝まで浸かつて……チマの裾をたくし上げ、水を撥ねるように
……踊つてるみたいだった……向こう岸まではかなりある……子どもには渡れそ
うもない……やむなく彼は引き返した……オモニの行き先もわからずじまい……
しかしひとつ合点がいったんだよ……まえまえから不思議に思つてたんだが……
オモニはなぜいつも足を濡らして帰ってくるのか……何てこたあない……裸足で
川を渡つてたのさ……それを知つてからというもの、オモニのことが不憫でなら
なくなつた……さみしさや恨み辛みをすっかり忘れて……何しろ毎晩、渡つてた
からなあ、あかぎれだらけの足で……雨で水嵩が増していても、雪が降りしきつ
ていても、仕事でくたびれていても、体を壊して寝込んでいても……ひよつとし
たら罰を受けてるのかもしれない、しかも自分の罪を被つて……僕のせいだ……
そう思つたんだとよ、彼は……そして考へたつて……オモニのために何かできる
ことはないだろうか……

……

日野

甲斐野

甲斐野

甲斐野

甲斐野

甲斐野

甲斐野

甲 斐

そうだ……橋をつくってあげよう、石の橋を……（笑みを漏らし）突拍子もないよな……でも彼は大まじめだった……来る日も来る日も川に石を沈め、石を積み、石を並べていったんだよ……オモニの目を盗んで……ときには大きな石を探しに遠出したり……いや、決して音をあげたりはしなかったね……爪が裂けようが、皮が剥けようが……オモニのために……ただそれだけ……オモニが苦もなく川を渡っていけるように……その一心で運び続けたんだ、数えきれないほどたくさん石を……村の衆は寄ってたかってやめさせようとしたけどな……川を堰いたら、田んぼに水が引けなくなるとか……何やかやともっともらしい理屈をつけて……だけどほかにも理由があったんだよ……オモニが川を渡るわけを知ってたのさ、どこへ何しに行くのかも……知ってたから、止めたんだ……ああ、村中、みんな知ってた……知らなかったのは息子だけ……おめでたい奴だぜ……

甲 日 斐 野

男がいたんだってな……だからだろ……彼はそれをオモニの口から聞かされた……こともあろうにあんたの口から……夏の盛りのころだっけ……夜中に突然、彼を叩き起こして当たり散らしたそうじゃねえか、男に捨てられた腹いせに……竹の棒でぶちながら……おまえのせいだ、おまえのせいだ……おまえさえないけりやいっしょになれたのに、おまえなんか生まれてこなけりやよかつたのにつて……明け方まで引つきりなしに……たしかその朝だったかな、雨が降りはじめたのは……三日三晩、一時もやむことなく、ようやくあがったと思ったら、橋はきれいさっぱり消えてた……

甲 日 斐 野

……思い出したか……いや、憶えてるよなあ……

甲 日 斐 野

……よくわかりませんでした……

甲 日 斐 野

……はあ……？

甲 日 斐 野

……あなたの話、難しい……喋（しゃべ）るも早い……

甲 日 斐 野

……じゃ、まるでわからなかったのか……少しはわかったろう……

甲 日 斐 野

……（首を振って）オモニだけ……

甲 日 斐 野

……一体、何のために国語を学んできたんだ……ええ？……何のために国語を……

甲 日 斐 野

……（頭を下げて）すみません……もう一度（いちど）いつてくたさい……ウリマルお願

甲 日 斐 野

……いします……

甲 日 斐 野

……黙れ……

甲 日 斐 野

……あんたは恥だ……俺の恥そのものだ……

甲 日 斐 野

……行こう……

日野、席を立つと、まっすぐまえを見据え、しっかりとした足どりで教室を出ていく。

銃口を向けたまま、あとに続く甲斐。

無人の教室。

机に残された便箋が風に舞い、電灯がはかなげに瞬く。

どれくらいたっただろう。

戸口に人影。柳だ。室内をひと頻り見渡し、教壇に目を向ける。

柳
（囁くように） 甲斐さん……？

柳、足音を忍ばせて歩み寄り、教卓を覗く。むろん誰もいない。小さく息を漏らすと、やおら威儀を正して神棚を仰ぎ、胸のまえで手を組んで首を垂れる。

柳
……

ほどなくして丸尾が廊下から顔を覗かせる。柳の敵かなたたずまいに声をかけられない。

丸尾
……

気配を察して振り返る柳。

丸尾 私です……（室内に入ってくる）

柳 ああ、丸尾さん……どうかされました……

丸尾 いや、あの……また帰ってなくて……

柳 哲くん……？

丸尾 今日、学校には……？

柳 ええ、普段通り……授業はどうにおりましたが……どこかで遊んでいるんじゃないかしら……

丸尾 まあ、そうたといいてすけど……

柳 何かあったんですの……

丸尾 ……（戸口から廊下を覗く）

柳 誰もおりません……

丸尾 これを見てください……哲の服の中にあつたてす……

丸尾、懐から掌大の冊子を取り出す。色褪せ、擦り切れた代物だ。

柳 教科書……？

丸尾 いえ、ハングルの本……私、読めませんから……（冊子を渡す）

柳 ……（ページを繰る）

丸尾 あいちゅは国語しか読まない……たからおかしい思いました……何てすか……

柳 アカですわ……

丸尾 あか……？

柳 ……

丸尾 あかつて何てす……赤いの赤……？

柳 朝鮮共産党……もう活動してないでしょうが……これもずいぶん昔に書かれた

ものですし……

丸尾 ……？

柳 (冊子を返して) 今晚中に燃やしたほうが……

丸尾 燃やす……？

柳 さもないと哲くんも捕まってしまう……

丸尾 燃やせば、消えますか……罪(ちゆみ)も消えますか……

柳 ちゆみ……？

丸尾 罪です、罪……

柳 罪って……

丸尾 本当のこと教えてください……

柳 いや、何をおっしゃっているんだか……

丸尾 息子が犯人ですか、落書き……

柳 ……

丸尾 柳先生……

柳 (頷く)……

丸尾 おそらくその本のことばを写したんじゃないかと……二三、見覚えのある文句が

柳 ……それに偶然、見かけてしまいましたしね……教員になるまえのことでしたわ

丸尾 ……夏休みの朝、哲くんが教室から飛び出してきたんですよ、黒板にハングルを

柳 書き残して……

丸尾、頷れるように跪き、床に額ずくと、嗚咽を漏らす。

丸尾 哲……ごめんな、哲……ごめんなあ……

柳 ……

丸尾 (顔を上げて) あいちゆは罪を犯した……でも悪いは私です……息子のこと何にも

柳 知らない……それは親の罪です……貧しいことも、汚くて臭いことも、国語が拙

丸尾 (ちゆたな) いことも……むろん白丁であることも……じえんぶ私の罪……だから

柳 私が罰(ばちめ)を受けます……学校大好(たいしゅ)きたから、哲……もつと勉強

丸尾 して偉くなつてほしいから……てすから先生、私を警察に……

柳 うんざりですわ……

丸尾 はい……？

柳 何もかも自分のせいにして……この世の罪をすべて背負つてみたい……私まで

丸尾 罪を悔い、赦しを請いたくなるじゃありませんか、身に覚えがあるうと、なかる

柳 うと……冗談じゃない……何だつて私が……悪いことなんてひとつもしていない

丸尾 のに……ええ、国語を教えただけですよ……一生懸命、教えましたわ……それを

柳 罪だと認めたら……(首を振り)考えたくもありませんね……どの道、もうもとは

丸尾 戻れないでしょうし……

柳 ……

丸尾 お墓までもって行ってください……私もそうします……

丸尾 ……（立ち上がり、深々と頭を下げる）
柳 すみません……行かないと……

教室を出ていこうとするも、すぐさま足を止める柳。

柳 そうだ……丸尾さんにお願いが……

丸尾 何でもしますよ……

柳 甲斐さんを探していただけないかしら……

丸尾 甲斐さんを……？

柳 いいえ、朴さん……

丸尾 光熙ですね……どうして光熙を……

柳 自分が落書きの犯人だと思いきんでは……

丸尾 光熙が……（首を振って）犯人は私の息子です……

柳 だからってわけじゃありません……哲くんが犯人だから、朴さんの仕業ではない

……というわけじゃ……

丸尾 ……？

柳 ハングルが書けないんですよ、あの方……

丸尾 ハングルが書けない……？

柳 読むことも……たぶん話すことさえも……朝鮮人でありながら……もしかしたら
そのことを死にたいほど恥じ入ってるかもしれない……

丸尾、ふと神棚を見上げる。

丸尾 ひとちゅお尋（たじゅ）ねしても……

柳 ええ……

丸尾 何に祈っていたてす……

柳 祈っていた……？

丸尾 （手を組み）こう……

柳 ああ、祈っていたのか、私……何だろう……陛下にかしら……

丸尾 へいか……？

柳 恐れ多くも天皇陛下ですわ……

丸尾 はあ……

柳 ほかにいらつしやいませんもの……どなたにお祈りすればいいのやら……

丸尾 私もそれが……お祈りしたいことはいっぱいあるてすけど……

そこへ不意に張本が現れる。国民服姿。松葉杖で体を支えている。虚ろな面もちだ。

柳 先生……いつ……

張本 ……

柳 張本先生……

張本 落書き……

柳 えっ……

張本 学校中に落書きが……

丸尾 哲……

そのとき、遠くかすかに銃声一発、続けざまにもう一発。

窓辺に駆け寄る柳。

窓外は墨を刷いたような闇。

柳 ……

エピソード

一九四五（昭和二十）年八月中旬のある日。午前十一時ごろ。

二年五組の教室。

室内の様子に違いはないものの、どことなく空気が澱となって滞っているかのようだ。

「カヲアワセテ」という習字の書の文言も子どもにない教室には空々しい。

窓も戸も開け放たれているが、蟬の鳴き声がかまびすしいばかりで、風はそよとも吹き抜けない。

木之下が机の上に仰向けに横たわっている。裸に禪一丁、頭に包帯。傍らにはいつもの旅行鞆。教科書を呟くように読んでいる。『初等科 国語 卷八』。

「二十 国語の力」

ねんねんころりよ、おころりよ、

ばうやはよい子だ、ねんねしな。

だれでも、幼い時、母や祖母にだかれて、かうした歌を聞きながら、快い夢路にはいつたことを思ひ出すであらう。このやさしい歌に歌はれてゐることはこそ、わがなつかしい国語である。

君が代は千代に八千代にさざれ石のいはほとなりてこけのむすまで

この国歌を奉唱する時、われわれ日本人は、思はず襟を正して、榮えますわが皇室の萬歳を心から祈り奉る。この国歌に歌はれてゐることばも、またわが尊い国語にほかならない。

われわれが、毎日話したり、聞いたり、讀んだり、書いたりすることばが国語である。われわれは、一日たりとも、国語の力をかりずに生活する日はない。われわれは、国語によつて話したり、考へたり、物事を學んだりして、日本人となるのである。国語こそは、まことにわれわれを育て、われわれを教へてくれる大恩人なのである。

このやうに大切な国語であるのに、ともすれば国語の恩をわきまへず、中には国語といふことさへも考へない人がある。しかし、ひとたび外國の地を踏んでことばの通じないところへ行くと、だれでも国語のありがたさをしみじみと感じる。かういふところで、たまたまなつかしい日本語を聞くと、まるで地獄で佛にあつた心地がし、愛國の心が泉のやうに湧き起るのを感じるのである。

わが國は、神代このかた萬世一系の天皇をいただき、世界にたぐひなき國體を成して、今日に進んで來たのであるが、わが國語もまた、國初以來繼續して現在に及んでゐる。だから、わが國語には、祖先以來の感情・精神がとけ込んでをり、さうして、それがまた今日のわれわれを結びつけて、國民として一身一體のやうにならしめてゐるのである。もし國語の力によらなかつたら、われわれの心は、どんなにばらばらになることであらう。してみると、一旦緩急ある時、國を擧げて國難に赴くのも、皇國のよるこびに、國を擧げて萬歳を唱へるのも、一つには國語の力があづかつてゐるといふはなければならぬ。

國語は、かういふやうに、國家・國民と離すことのできないものである。國語を忘れた國民は、國民ではないとさへいはれてゐる。國語を尊べ。國語を愛せよ。國語こそは、國民の魂の宿るところである。

半分も読まずに教科書を机に伏せ、目を瞑る木之下。たちまち寢息を立てる。

木之下
……

教室のまえをブラウスにもんぺ姿の柳が通り過ぎ、すぐに踵を返して戻ってくる。人影が目に入ったのだろう。室内を覗きこむと、木之下のさまに小さく悲鳴を漏らし、顔を背ける。

木之下
（体を起こし） ああ、おはようございます……（机から降りようとする）

柳
來ないで……（戸口の陰に隠れる）

木之下
えっ……

柳
（声）服……

木之下
ごめんなさい……

柳
（声）まったくもう……

木之下
（シャツとズボンを身につけながら） さつき着いたばかりなんです、京城駅に……その足で立ち寄りまして……夏休みだから、誰もいないだろうと思いましたが、いつもの癖で……どうぞ……

柳
（顔を覗かせ） 怪我でもしたの……（木之下の頭を指す）

木之下
あつ、これ？……空襲に遭ったんですよ……焼夷弾の爆風で吹き飛ばされちゃつて、気づいたときには一面火の海……危うく呑みこまれそうにね……ひどいもんです、東京は……毎晩、B29がやってきて……

柳
それでまたこちらに……

木之下
命辛々……大変だったんですよ、戻ってくるだけでも……地元の漁船を雇つて、

夜中に新潟から釜山へ向かったんですが……要は密航……漁師さんも尻込みして
ましたもん……
そうまでして……

柳 連絡船は動いちゃいませんでしたから、玄界灘に機雷が仕掛けられたせいで……
木之下 実際、何隻も沈んだとか……第一、下関へ行こうにも汽車が走ってなかったでし
よう、広島に新型爆弾が落とされましたんで……ご存じですか……

柳 噂では……

木之下 数百万人死んだとも……もうおしまいだ……

柳 神風が吹きます……

木之下 はい……？

柳 神州は不滅ですから……

木之下 まだそんな戯言……日本人でさえ信じちゃいないのに……

柳 ……

木之下 （頭を下げ）失礼いたしました……（旅行鞆を掴み）今日はこれで……

教室を出ていこうとする木之下。

柳 よろしいんですの、張本先生にお会いしなくても……

木之下 えっ……（立ち止まる）

柳 じきにいらつしやるかと……

木之下 先生がどうして……首を切られたはずじゃ……

柳 戻っていただいたんですよ、先生が幾人も出征されましたから、人手が足りなく
て……

木之下 いや、でも札つきですよねえ……

柳 いえ、今や忠良なる皇国臣民ですわ……

木之下 （首を振り）先生に限って……

柳 でなければそもそも出てこられやしないでしょう……

廊下をやってきた根岸、戸口で足を止める。国民服姿。

根岸 何だい……来たのか……

木之下 ああ、ええ……今朝方、帰ってきまして……

根岸 おまえじゃなくて柳くん……（室内に入ってくる）

柳 遅くなって申しわけございません……

根岸 お袋さんのそばにいてやりやいいものを……いっしょにラジオ聴いてりや……

柳 （首を振り）ラジオなんてうちには……あつ、そろそろ時間では……

木之下 何かはじまるんです……

根岸 重大放送だよ……

木之下 重大放送……？

根岸 どうせまた大本営の発表だろうが……

柳 いえ、いよいよ本土決戦に臨むんじゃないかしら……一億玉砕ですよ……身命を

賭して陛下をお守りいたしませんと……

木之下 僕も勘定に入ってるんですかね、その一億に……

柳 まいりましょう……

根岸 おまえも急いで帰れ……

ふたりが立ち去ろうとした矢先、張本が松葉杖をついて入ってくる。国民服姿。

張本 （大きく息をついて）間に合ったか……

根岸 遅いぞ……

張本 急に呼び出されても……（机に腰かけ）この足じゃ……おお、木之下……

木之下 お久しぶりです……

根岸 話はあとにしてくれ……

柳 お先に……

教室を出ていく柳。

根岸 今日明日が山だつてな、柳くんのお袋さん……

張本 らしいですねえ……

木之下 山つて……？

張本 長らく病と闘ってこられたんだが……

木之下 ああ、そうでしたか……

根岸 親の最期を看とるのが子の務めなのに……

教室を出ていく根岸。

張本 俺も行かねえと……（席を立ち）悪いな……

木之下 あの……

張本 しばらくはこつちにいるんだろう……まあ、いつでも遊びに来なよ……

木之下 変われば変わるもんですね……

張本 聞いたのか……

木之下 鵜呑みにしちゃいけません……

張本 嘘だといってほしい……？

木之下 是非……

張本 嘘だよ、真つ赤な嘘……

木之下 じゃ、何だつてまた教壇に立てるんです……転向なさったからでしょう……

張本 つまんねえことば覚えてきやがって……

木之下 先生……

張本 しかたなかったのさ……同志がふたりも死んじまったんだぞ、俺の目のまえでな……見る見るうちに体が弱つていって、飯も水も喉を通らなくなって、糞も垂れ

流すようになって、しまいにはウリマルすら話せなくなつて……

木之下 祖国を見捨てるんですか……

張本 どこに祖国が……ええ？……どこに……見捨てる祖国もありやしねえ……

木之下 ……

張本 殴つてくるかと思いきや……（木之下に背を向ける）

木之下 先生、あと少しお時間を……

張本 ……（振り返る）

木之下 内地であるとき、こんな光景を目にしまして……韓服纏つたオモニが鶏の真似をしてたんです、八百屋の店先で……こう……腰を屈めて、腕をばたばたさせて、おまけに鳴き声まで……コツキョ・クークー・コーコーってね……お尻の下にはこれくらいの丸い石ころ置いて……卵ですよ、卵……卵がほしいのに、卵ということばを知らなかつたんです、オモニは……だから鶏の真似を……女将さんやら近所の奥さんに笑われながら、コツキョ・クークー・コーコーって繰り返し……病氣の子どもにどうしても卵を食べさせたかつたそうで……

張本 何がいいたい……

木之下 実は独立運動に参加しようかと……上海か満州の組織に入つて……願わくは先生とともに……

張本 （大笑いして）俺は日帝の犬だぜ……

木之下 そんないい方なさらなくてください……恥ずかしいと思いませんか……

張本 恥ずかしいなんていつてちゃ、生きていかねえのよ……おまえはいいけどな、恥ずかしい真似をしなくても、生きていけるから……

木之下 張先生……

張本 金輪際、恩師だと思わんでくれ……

根岸、小脇にラジオを抱え、柳の腕を掴んで駆けこんでくる。

柳 だから離してください……（根岸の手を振り払い、出ていこうとする）

根岸 待て……

柳 教員室に戻りませんと……

根岸 やめておけ……（教卓にラジオを置く）

柳 みなさんといっしょに聴けばいいじゃないですか……

根岸 日本人と？……どんな顔して……涙でも流せつてのよ……（ラジオのつまみを捻る）

柳 ええ……

根岸 農らは朝鮮人なんだぞ……

張本 どうしたんです……

根岸 この役立たずめ……（ラジオを叩きながら）おわつたんだよ……

張本 おわつた……？

根岸 戦争がな……負けたのさ、日本が……

木之下 ほくら……

根岸 しっ……閉めろ……

木之下 はい……（戸を開めきる）

ラジオから雑音混じりに聞こえてくるのは昭和天皇による終戦の詔勅の音読、いわゆる玉音放送。その途中から聴くことになる。
ひとり直立不動の柳。首を垂れもせず、天を仰ぎもせず、じっとラジオを見つめる。

ラジオ

朕深く世界の大大勢と帝国の現状とに鑑み、非常の措置を以て時局を收拾せむと欲し、茲に忠良なる爾臣民に告ぐ……朕は帝国政府をして米英支蘇四国に対し、其の共同宣言を受諾する旨、通告せしめたり……抑々、帝国臣民の康寧を図り万邦共栄の樂を偕にするは、皇祖皇宗の遺範にして朕の拳々措かざる所、曩に米英二国に宣戦せる所以も、亦実に帝国の自存と東亜の安定とを庶幾するに出て他国の主権を排し、領土を侵すが如きは固より朕が志にあらず……然るに交戦已に四歳を閲し朕が陸海將兵の勇戦、朕が百僚有司の励精、朕が一億衆庶の奉公各々最善を尽くせるに拘らず、戦局必ずしも好転せず……世界の大大勢、亦我に利あらず、加之敵は新に残虐なる爆弾を使用して頻りに無辜を殺傷し惨害の及ぶ所、真に測るべからざるに至る……而も尚、交戦を継続せむか、終に我が民族の滅亡を招来するのみならず、延て人類の文明をも破却すべし……斯の如くむば、朕何を以てか億兆の赤子を保し皇祖皇宗の神靈に謝せむや……是れ、朕が帝国政府をして共同宣言に応せしむるに至れる所以なり……朕は帝国と共に終始東亜の解放に協力せる諸盟邦に対し、遺憾の意を表せざるを得ず……帝国臣民にして戦陣に死し、職域に殉し、非命に斃れたる者、及び其の遺族に想を致せば五内為に裂く……且、戦傷を負ひ、災禍を蒙り家業を失ひたる者の厚生に至りては、朕の深く軫念する所なり……惟ふに今後、帝国の受くべき苦難は固より尋常にあらず……爾臣民の衷情も、朕善く之を知る……然れども、朕は時運の趨く所、堪へ難きを堪へ、忍ひ難きを忍び、以て万世の為に太平を開かむと欲す……朕は茲に国体を護持し得て、忠良なる爾臣民の赤誠に信倚し、常に爾臣民と共に在り……若し夫れ、情の激する所、濫に事端を滋くし、或は同胞排擠互に時局を乱り為に大道を誤り、信義を世界に失ふが如きは、朕最も之を戒む……宜しく挙国一家子孫相伝へ、確く神州の不滅を信じ、任重くして道遠きを念ひ、総力を将来の建設に傾け、道義を篤くし志操を鞏くし誓って国体の精華を發揚し、世界の進運に後れざらむことを期すべし……爾臣民其れ克く朕が意を体せよ……御名御璽……昭和二十年八月十四日……

放送中に。

根岸 （声をひそめ）誰だい、ちんって……

張本 陛下です……

根岸 じゃ、これ、天皇の声かね……はじめて聞いたよ……

木之下 日本人もでしょう……

放送中に。

根岸 （声をひそめ）おい……おいったら……

張本 うるさい……

根岸 わかるのかい……

張本 えっ……

根岸 何をいつてるのか……

張本 全然……

根岸 よかった……

木之下 わかるんですかねえ、日本人なら……

張本 さすがにわかるだろう……

根岸 これじゃ皇国臣民になれっこないなあ……

柳 静かにしていただけませんか……

『君が代』の奏楽を挟んで放送が終了。「謹みて天皇陛下の玉音放送を終わります」。続いてアナウンサーによる詔書の奉読。「謹んで詔書を奉読いたします」。
呆然と立ちつくす一同。

根岸 一体、儂らはどうすればいいんだ……教えてくれ……

張本 といわれても……先ことは……

根岸 いや、今だよ、今……喜べばいいのか、それとも悲しめば……

木之下 まっ、とりあえず万歳三唱でも……

根岸 そうだなあ……

木之下 では、早速……（廊下を覗いて）しめやかに……

根岸 （声を抑ええ、日本の敗北（はいぼく）と朝鮮の解放を祝して……万歳（ばんざい）

……

木之下 万歳です、万歳（ばんざい）じゃなくて……

根岸 万歳（ばんざい）でも万歳（ばんざい）でも……

木之下 だから万歳……

根岸 万歳（ばんざい）……

木之下 万歳……

根岸 万歳……

木之下 万歳……

根岸 万歳……

木之下 万歳……

張本 （ひとりごとのように）万歳でもねえだろうに……

木之下 僕は街に出てみます……きっとお祭り騒ぎでしょうね……

張本 うっかり国語使うんじゃねえぞ……

木之下 よしてくだい……国語なんてここでしか口にしませんよ……

木之下、旅行鞆を掴んで飛び出していく。

張本 さて、次は英語でも勉強すつか……

根岸 英語……？

張本 *Yes, times have changed.*……以前から考えてはいたんですよ……いずれ日本は降伏するだろうが、朝鮮は独立できやしない……口助かアメ公、必ずどちらかに支配される……よし、一丁アメリカにかけてみよう……ならば英語を覚えといたほうが賢明だと……

根岸 独立できないだつて？……馬鹿（ばか）な……

張本 半島に上陸した暁にはモーニングを着用し、最敬礼でお出迎えしませんと……

Welcome to Korea.……つね……

軒下に金村。駆けてきたのだろう。息が荒い。詰襟の白い制服姿。腰にはサーベル。

金村 先生、逃げてください……

根岸 逃げる……？

金村 朝鮮人が暴（あば）れております……日本人の商店に石を投げたり、火をつけたり……一部（いちぶ）の輩（たぐひ）ですがね……そのうちこちらにも……

根岸 何だつて学校に……

張本 （鼻で笑つて）とぼけたつて無駄です……

根岸 いや、わかっちゃいるけど……でも同胞じゃないか……儂らにまで手出しはせんだろう……

金村 おことばですが……

根岸 はい……？

金村 そんなに国語が上手（じょうじゆ）な朝鮮人はいませんよ……

張本 こりやとんずらしたほうがよさそうだな……

根岸 儂はうちに帰るよ、家内や子どもが心配だし……ほら、おまえさんらも……

教室をあとにする根岸。

金村 さあさあ、早く……

張本 ああ、ええ……お宅さんは……？

金村 京城の治安を守りませんとね、同胞の恨みを買おうが……（立ち去ろうとする）

張本 できるだけ穩便にな……

金村 （ラジオに目をとめ）あつ、そうそう……朴という方がおりましたてしよ……下の名前が光熙……日本名はたしか……

張本 甲斐壮一郎……

金村 そう、甲斐さん……

張本 見つかったのか……

金村 いえ、先たつてあの人の話を耳にしたんです……たまたま飲み屋で総督府の同僚

張本 （とうりよう）と隣り合わせて……甲斐さん、官舎ではいちゅもラジオを聴いてた
 そうてすね……遊び歩いたりもせじゅに……とりわけ『国語の時間』という番組
 （ばんぐみ）がお気に入りだったみたいで……毎日、欠かさじゅ……
 張本 不安だったのさ……わかるよ……
 金村 私も……

金村、校庭を駆け去っていく。

張本 久しぶりに聞いたなあ、甲斐さんの名前……いいや、朴さんか……（笑みを漏らし
 「さん」までつけることあねえけど……

柳 ……

張本 どこでどうしてるんだか……

柳

私に聞かれましても……そのような方は存じておりませんので……

張本 何をいつてるんだい……あいつだよ、あいつ……君もよく知ってる……

柳 ……（首を振る）

張本 はあ？……からかってんのか……

柳

もう一度、お名前を……

張本 甲斐壮一郎……いや、だから朴光熙……

柳

さあ……

張本 嘘だろ……

柳

本当にいらつしやるんですの、そんな方……さっぱり憶えがございませんが……

張本 行こう……

柳

ここに残ります……

張本 吊るし上げを食うぞ……

柳

しかたがありませんでしょう……

張本 ……

教室をあとにする張本。

柳、やおら椅子に腰かけると、机に伏せられた教科書を手にとり、目を落として読む。

はつきりと唇を開くも、声には出さない。声は失ってしまったかのよう。

突然、蝉時雨がやみ、窓が割れる。矢継ぎ早に石が投げこまれ、ガラス片が飛び散って
 いく。

教科書を読み続ける柳。

柳

……

引用資料

- 『普通学校 国語讀本 卷七』（朝鮮総督府翻刻発行）
- 『小學 国語讀本 卷十』（朝鮮総督府翻刻発行）
- 『小學 国語讀本 卷十二』（朝鮮総督府翻刻発行）
- 『初等科 国語 卷八』（文部省発行）

参考資料

- 『「国語」の近代史』安田敏朗（中央公論）
- 『〈国語〉と〈方言〉のあいだ 言語構築の政治学』安田敏朗（人文書院）
- 『言語帝国主義とは何か』三浦信孝・糟谷啓介（藤原書店）
- 『「国語」という思想』イ・ヨンスク（岩波書店）
- 『日本語の近代』小森陽一（岩波書店）
- 『ナショナル・ヒストリーを超えて』小森陽一・高橋哲哉 編（東京大学出版会）
- 『ことばと国家』田中克彦（岩波書店）
- 『言語学とは何か』田中克彦（岩波書店）
- 『言語の思想』田中克彦（日本放送出版協会）
- 『名前と人間』田中克彦（岩波書店）
- 『作文のなかの大日本帝国』川村湊（岩波書店）
- 『異郷の昭和文学』川村湊（岩波書店）
- 『海を渡った日本語』川村湊（青土社）
- 『生まれたらそこがふるさと 在日朝鮮人文学論』川村湊（平凡社）
- 『ソウル都市物語』川村湊（平凡社）
- 『「酔いどれ船」の青春』川村湊（インパクト出版会）
- 『酔いどれ船』田中英光（芳賀書店）
- 『韓国における国語・国史教育』森田芳夫（原書房）
- 『教科書に描かれた朝鮮と日本』李淑子（ほるぷ出版）
- 『軍国美談と教科書』中内敏夫（岩波書店）
- 『尋常小学校国語讀本』高木市之助（中央公論）
- 『消えた「最後の授業」』府川源一郎（大修館書店）
- 『小説 朝鮮総督府』柳周鉉（徳間書店）
- 『ある朝鮮総督府警察官僚の回想』坪井幸生（草思社）
- 『創氏改名』宮田節子（明石書店）
- 『朝鮮民衆と「皇民化」政策』宮田節子（未来社）
- 『名を喪つて』リチャード・キム（サイマル出版会）
- 『朝鮮の女』角圭子（サイマル出版会）
- 『朝鮮人はなぜ「日本名」を名のるのか』金一勉（三一書房）

- 『朝鮮の近代史と日本』旗田巍（大和書房）
- 『朝鮮人特攻隊 「日本人」として死んだ英霊たち』斐淵弘（新潮社）
- 『朝鮮人（皇軍）兵士たちの戦争』内海愛子（岩波書店）
- 『植民地朝鮮の日本人』高崎宗司（岩波書店）
- 『植民地ノート』千田夏光（日中出版）
- 『従軍慰安婦・慶子』千田夏光（クラブハウス）
- 『生活の中の植民地主義』水野直樹（人文書院）
- 『日本の朝鮮・韓国人』樋口雄一（同成社）
- 『幻想と欲望 漫文漫画で読み解く日本統治時代の京城』申明直（東洋経済新報社）
- 『朝鮮人の光と影』呉林俊（合同出版）
- 『記録なき囚人 皇軍に志願した朝鮮人の戦い』呉林俊（文元社）
- 『慶州は母の呼び声』森崎和江（筑摩書房）
- 『季刊三千里15号 特集 8・15と朝鮮人』（三千里社）
- 『戦争・ラジオ・記憶』貴志俊彦・川島真・孫安石編（勉強出版）
- 『それでも日本人は「戦争」を選んだ』加藤陽子（朝日出版社）
- 『満州事変から日中戦争へ』加藤陽子（岩波書店）
- 『日本が「神の国」だった時代』入江曜子（岩波書店）
- 『子どもたちの太平洋戦争——国民学校の時代——』山中恒（岩波書店）
- 『ぼくら墨ぬり少国民』和田多七郎（太平出版社）
- 『ボクらの京城師範付属第二国民学校』金昌國（朝日新聞出版）
- 『降ろされた日の丸 国民学校一年生の朝鮮日記』吉原勇（新潮社）
- 『教師の戦争体験の記録』岩手県一関国民教育研究会 編（日本図書センター）
- 『教師は敗戦をどう迎えたのか』永井健児（教育史料出版会）
- 『傷痕と克服——韓国の文学者と日本——』金允植（朝日新聞社）
- 『現代朝鮮文学選』（創土社）
- 『（外地）の日本語文学選 朝鮮』黒川創（新宿書房）
- 『湯浅克衛 植民地小説集 カンナニ』池田浩士 編（インパクト出版会）
- 『小林勝 作品集』小林勝（白川書房）
- 『李朝残影』『族譜』『性欲のある風景』梶山季之（岩波書店）
- 『光の中に』金史良（三一書房）
- 『草深し』『土城廓』金史良（家の光協会）
- 『白楊木』『追われる人々』野口赫宙（家の光協会）
- 『小説 在日朝鮮人史』金達寿（創樹社）
- 『落照』金達寿（筑摩書房）
- 『故国まで』金達寿（河出書房新社）
- 『わがアリランの歌』金達寿（中央公論）
- 『アリラン峠の女』高峻石（田畑書店）
- 『アリラン峠の旅人たち』安宇植 訳編（平凡社）
- 『オンドル夜話』尹学準（中央公論）
- 『鴉の死』『1945年 夏』金石範（平凡社）

- 『転向と親日派』金石範（岩波書店）
- 『民族・ことば・文学』金石範（創樹社）
- 『ことばの呪縛』金石範（筑摩書房）
- 『彼方に光を求めて』高史明（筑摩書房）
- 『生きることの意味 ある少年のおいたち』高史明（筑摩書房）
- 『またふたたびの道 砧をうつ女』李恢成（講談社）
- 『われら青春の途上にて』『青丘の宿』李恢成（講談社）
- 『凍える口』『土の悲しみ』金鶴永（作品社）
- 『「在日」のはざままで』金時鐘（平凡社）
- 『「在日」を考える』尹健次（平凡社）
- 『在日』姜尚中（講談社）
- 『在日 ふたつの「祖国」への思い』姜尚中（講談社）
- 『ポストコロニアリズム』姜尚中 編（作品社）
- 『在日一世の記憶』小熊英二・姜尚中 編（集英社）
- 『（日本人）の境界』小熊英二（新曜社）
- 『百萬人の身世打鈴』『百萬人の身世打鈴』編集委員 編（東方出版）
- 『在日義勇兵帰還せず』金贊汀（岩波書店）
- 『在日、激動の百年』金贊汀（朝日新聞社）
- 『閔釜連絡船 海峡を渡った朝鮮人』金贊汀（朝日新聞社）
- 『異邦人教師』金贊汀（講談社）
- 『放浪伝 昭和史の中の在日』金文善（彩流社）
- 『二世の起源と「戦後思想」』李順愛（平凡社）
- 『族譜 日本の中の朝鮮』許南英（平凡社）
- 『鶏は鳴かずにいられない——許南麒物語——』孫志遠（朝鮮青年社）
- 『半難民の位置から』徐京植（影書房）
- 『鳳仙花のうた』李正子（影書房）
- 『朴正熙』河信基（光人社）
- 『日本における朝鮮少数民族』エドワード・W・ワグナー
- 『在日朝鮮人——私の青春』朴慶植（三一書房）
- 『コリアン部落 幻の韓国被差別民白丁を探して』上原義広（ミリオン出版）
- 『歴史からかくされた朝鮮人満州開拓団と義勇軍』陳野守正（梨の木舎）